

箕輪遺跡

町道503号線改良工事に伴う
第14・15次埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2004年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

箕輪遺跡

町道503号線改良工事に伴う
第14・15次埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2004年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会



8 トレンチ水路状遺構



23 トレンチ水田跡込み遺構

箕輪過跡平西圖

地名	里數	地名	里數
新村	一	大村	一
中村	二	小村	二
南村	三	北村	三
東村	四	西村	四
北村	五	南村	五
東村	六	西村	六
中村	七	北村	七
南村	八	東村	八
北村	九	中村	九
南村	十	西村	十
北村	十一	東村	十一
中村	十二	南村	十二
北村	十三	東村	十三
中村	十四	南村	十四
北村	十五	東村	十五
中村	十六	南村	十六
北村	十七	東村	十七
中村	十八	南村	十八
北村	十九	東村	十九
中村	二十	南村	二十
北村	二十一	東村	二十一
中村	二十二	南村	二十二
北村	二十三	東村	二十三
中村	二十四	南村	二十四
北村	二十五	東村	二十五
中村	二十六	南村	二十六
北村	二十七	東村	二十七
中村	二十八	南村	二十八
北村	二十九	東村	二十九
中村	三十	南村	三十
北村	三十一	東村	三十一
中村	三十二	南村	三十二
北村	三十三	東村	三十三
中村	三十四	南村	三十四
北村	三十五	東村	三十五
中村	三十六	南村	三十六
北村	三十七	東村	三十七
中村	三十八	南村	三十八
北村	三十九	東村	三十九
中村	四十	南村	四十
北村	四十一	東村	四十一
中村	四十二	南村	四十二
北村	四十三	東村	四十三
中村	四十四	南村	四十四
北村	四十五	東村	四十五
中村	四十六	南村	四十六
北村	四十七	東村	四十七
中村	四十八	南村	四十八
北村	四十九	東村	四十九
中村	五十	南村	五十
北村	五十一	東村	五十一
中村	五十二	南村	五十二
北村	五十三	東村	五十三
中村	五十四	南村	五十四
北村	五十五	東村	五十五
中村	五十六	南村	五十六
北村	五十七	東村	五十七
中村	五十八	南村	五十八
北村	五十九	東村	五十九
中村	六十	南村	六十
北村	六十一	東村	六十一
中村	六十二	南村	六十二
北村	六十三	東村	六十三
中村	六十四	南村	六十四
北村	六十五	東村	六十五
中村	六十六	南村	六十六
北村	六十七	東村	六十七
中村	六十八	南村	六十八
北村	六十九	東村	六十九
中村	七十	南村	七十
北村	七十一	東村	七十一
中村	七十二	南村	七十二
北村	七十三	東村	七十三
中村	七十四	南村	七十四
北村	七十五	東村	七十五
中村	七十六	南村	七十六
北村	七十七	東村	七十七
中村	七十八	南村	七十八
北村	七十九	東村	七十九
中村	八十	南村	八十
北村	八十一	東村	八十一
中村	八十二	南村	八十二
北村	八十三	東村	八十三
中村	八十四	南村	八十四
北村	八十五	東村	八十五
中村	八十六	南村	八十六
北村	八十七	東村	八十七
中村	八十八	南村	八十八
北村	八十九	東村	八十九
中村	九十	南村	九十
北村	九十一	東村	九十一
中村	九十二	南村	九十二
北村	九十三	東村	九十三
中村	九十四	南村	九十四
北村	九十五	東村	九十五
中村	九十六	南村	九十六
北村	九十七	東村	九十七
中村	九十八	南村	九十八
北村	九十九	東村	九十九
中村	一百	南村	一百

箕輪過跡平面圖（昭和25年測量）

序

本書は、箕輪町が行う町道503号線道路改良に先立って実施した、箕輪遺跡の第14・15次緊急発掘調査報告書であります。

箕輪遺跡は、町の南部に位置する低湿地帯に広がる大農耕遺跡で、郷土の発展に係わる重要な文化財の一つであります。この遺跡が注目されたのは、昭和27年に始まった大規模な土地改良工事中、稻作に使われた木製農具や多量の土器が出土したことによります。この時、この事実にいち早く着目した郷土史研究家の、故小川守人氏と故小池修兵氏らによって遺物の綿密な採取が行われ、きわめて貴重な資料を得ることができました。これは、郷土の歴史解明につの光をもたらしたものであり、両氏の多大な努力なくしては語ることのできないこととなっています。

町教育委員会が実施した本遺跡の緊急発掘調査は、昭和55年～昭和57年にかけて行われた国道153号線箕輪バイパスの建設に先立つ調査を皮切りに、今回で15回を数えることになりました。そして、これまでの調査の積み重ねによって多くの成果を上げており、徐々に遺跡のなぞが解き明かされつつあります。しかし、その反面度重なる開発により遺跡存続の危機を感じられます。

調査結果につきましては、本書の中で詳細に記しておりますので、本書を広く活用していただければ幸いと存じます。

本書の刊行にあたり、この発掘調査にご指導ご助言をいただいた諸機関の方々や、またご協力いただきました調査関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 大槻 武治

例　　言

- 1 本書は、平成14・15年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町967-8番地他に所在する、箕輪遺跡の第14・15次緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、箕輪町役場建設課の委託を受けて、町教育委員会が行った。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。
遺物の洗浄・注記—伊藤敏明、大串久子、春日誠子、後藤主計、向山英人、福沢幸一
遺構図の整理・トレース—池上賢司、内田綱江、金沢 蘭、中村孝子、根橋とし子
遺物の実測・拓本・トレース—内田綱江、大串久子、金沢 蘭
挿図作成—池上賢司、金沢 蘭、根橋とし子
写真撮影・図版作成—有賀一治、池上賢司、金沢 蘭、柴 秀毅、根橋とし子
- 4 本書の執筆は、有賀一治、根橋とし子、池上賢司が行った。また、市川隆之氏より箕輪遺跡バイパス調査の原稿を賜った。
- 5 本書の編集は、有賀一治、根橋とし子、池上賢司、金沢 蘭が行った。
- 6 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。
- 7 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
個人—市川隆之、白居直之、内田健一、小池喜志子
機関—(財)長野県埋蔵文化財センター、三日町区、箕輪南小学校、田中城常会

凡　　例

- 1 遺構実測図は、以下の縮尺に統一した。
水路状遺構 1:20 水田遺構 1:40
- 2 遺物の実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。
土器実測図—1:4 土器拓影図—1:3 木製品・金属器・石果類実測図—1:2
木杭実測図—1:8
- 3 土層及び土器の色調は、「新版 標準土色帖」を用いて記してある。
- 4 土器実測図における土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。
- 5 遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表す。
…水田跡 …疊断面 …炭化物 ●=土器 ▲=石果類
- 6 出土土器観察表の法量は、上から「口径・底径・器高」の順に記し、単位はセンチメートル(cm)である。また、現存する数値は「()」で、「-」は計測不能を表している。
- 7 出土木製品観察表、出土金属器観察表、出土石果類観察表、出土木杭観察表の重量の単位はグラム(g)で表している。法量はすべて最大値である。また、現存する数値は「()」で、「-」は計測不能を表している。木杭の重量は含水した値を表す。
- 8 図版の出土遺物の数字は、挿図における遺物番号を表す。
- 9 第15次調査ではトレンチ番号を変更して、第14次調査からの通し番号とする。

本文目次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

本文目次

挿図目次・表目次・図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査概要	2
第3節 調査の経過（調査日誌から）	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	5
第1節 地形と地質	5
第2節 歴史環境	7
第Ⅲ章 調査結果	10
第1節 調査の方法と結果概要	10
第2節 土層堆積状況	10
第Ⅳ章 遺構と遺物	12
第1節 検出遺構	12
第2節 遺物	14
第V章 まとめ	35
付 編 笑輪遺跡の伊那バイパス・松島バイパス関連の発掘調査から	38

図 版

報告書抄録

挿図目次

- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 第1図 調査位置図 | 第13図 (別図2) 22トレンチ平面図 |
| 第2図 周辺遺跡分布図 | 第14図 (別図3・4) 23・24トレンチ平面図 |
| 第3図 地形図・調査区設定図 | 第15図 (別図5) 25トレンチ平面図 |
| 第4図 トレンチ土層断面図 | 第16図 (別図6・7) 26トレンチ平面図 |
| 第5図 トレンチ土層断面図・全体図 | 第17図 出土土器実測図・拓影図 |
| 第6図 トレンチ土層断面図 | 第18図 出土木製品・金属器実測図 |
| 第7図 トレンチ土層断面図 | 第19図 出土石果類実測図 |
| 第8図 昭和29年度調査箕輪遺跡平面図(現地形図はめ込み) | 第20図 出土木製品実測図 |
| 第9図 トレンチ設定図 | 第21図 出土木製品実測図 |
| 第10図 8トレンチ実測図 | 第22図 出土木製品実測図 |
| 第11図 第15次調査区全体図・遺構図 | 第23図 調査地周辺の地形 |
| 第12図 (別図1) 20トレンチ平面図 | 第24図 箕輪遺跡と周辺遺跡出土の弥生土器 |

表 目 次

- | | |
|-----------------|--------------|
| 第1表 周辺遺跡一覧表 | 第4表 出土石果類観察表 |
| 第2表 出土土器・陶磁器観察表 | 第5表 出土木製品観察表 |
| 第3表 出土金属器観察表 | |

図版目次

- | | |
|--|--|
| 卷頭カラー図版1 8トレンチ水路状遺構・23トレンチ水田踏込み遺構 | |
| 卷頭図版2 箕輪町遺跡平面図(昭和29年調査) | |
| 図版1 発掘調査地全景、調査区土層堆積状況 | |
| 図版2 1・2・3・6トレンチ土層断面、状況写真 | |
| 図版3 7・9・10・11・12・15トレンチ土層断面、11・15トレンチ状況写真 | |
| 図版4 17・19トレンチ状況写真、セントラルコーポ前立合い土層断面 | |
| 図版5 20・22・24トレンチ土層断面 | |
| 図版6 8トレンチ水路状遺構1、20トレンチ水田・畦畔・水路状遺構2、22トレンチ木杭出土状況 | |
| 図版7 23トレンチ畦畔(道)出土状況、24トレンチ水田踏込み遺構、25トレンチ水田踏込み遺構・溝1出土状況 | |
| 図版8 出土遺物(弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器) | |
| 図版9 出土木製品・鉄砲の玉、出土石果類 | |
| 図版10 出土木製品 | |
| 図版11 出土木製品 | |
| 図版12 出土木製品 | |

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

箕輪遺跡は、弥生時代から現代に至る大農耕遺跡で、箕輪町の歴史を語るに最も重要な遺跡の1つである。その遺跡の中央を南北に縱走する国道153号線伊那バイパスの建設工事が、箕輪町三日町地区から南箕輪村との境界まで終了し、今後交通量の増大が予想される。そこで町では、バイパス周辺の道路整備を行うことになり、町道503号線は昭和30年代の耕地整理当時のままで、幅員も狭く未改良のままであるため拡幅工事を行い、生活道路としての機能を持たせた町道改良事業(地方特定道路整備事業)を行うことになった。今回の事業実施予定地の西側においては、平成12・13・14年度において県埋蔵文化財センターが調査を行い、多数の遺構、遺物を確認していることから今回の事業実施予定地においても、工事の実施に先立ち記録保存のための発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成14年度と15年度に行い、引き続き整理作業および調査報告書の作成作業が行われ、平成16年3月報告書刊行に至った。



第2節 調査概要

1 遺跡名 箕輪遺跡

2 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字三日町967-8番地他

3 事業期間 平成14年11月19日～14年12月17日（第14次調査）

平成15年11月18日～15年12月19日（第15次調査）

平成15年12月22日～16年3月10日（整理）

4 事務局

教育長 大槻 武治

文化財課長 柴 登巳夫

係長 原 省吾

係員 日野 和政 柴 秀毅（平成14年度） 有賀 一治（平成15年度）

臨時職員 中村 孝子 中坪 恵子

5 調査団

調査団長 大槻 武治

調査副団長 柴 登巳夫

調査担当者 柴 秀毅（平成14年度）

有賀 一治（平成15年度）

平成14年度

調査員 根橋とし子 福沢 幸一

調査参加者 池上 賢司 伊藤 敏明 井上 隆次 大槻 茂範 小川 陽三

大串 久子 春日 誠子 片桐 勇 金沢 蘭 後藤 主計

小松 峰人 佐野 正俊 田中 忠男 林 忠平 藤沢 具明

堀 五百治 堀内 昭三 松田 貞一 向山 英人 山田 武志

吉川 正剛

平成15年度

調査員 根橋とし子 金沢 蘭

調査参加者 池上 賢司 井上 隆次 内田 紗江 小川 陽三 大串 久子

春日 誠子 後藤 主計 小松 峰人 田中 忠男 藤沢 具明

堀 五百治 堀内 昭三 向山 英人 山田 武志 吉川 正剛

山崎 朝男

第3節 調査の経過（調査日誌から）

平成14年度

11月15日（金） 来週からの調査のため、調査地にトレントを設定する。

11月18日（月） 調査区北の水田より15本のトレントを重機にて開ける。

- 11月19日（火） 各トレンチの上面確認作業と、断面を割り分層する。
- 11月20日（水） 各トレンチの上面確認作業。断面測量と写真撮影をする。
- 11月21日（木） 各トレンチの断面測量、土層注記、写真撮影、8トレンチの掘り下げ。8トレンチには木杭列が出土する。
- 11月22日（金） 8トレンチの掘り下げ。水路状遺構を検出する。各トレンチの断面測量。ベンチマークの移動をする。
- 11月25日（月）～26日（火） 天候不順のため、室内作業。
- 11月27日（水） 8トレンチの断面測量と掘り下げ。重機にて16～19トレンチを開ける。
- 11月28日（木） 16～19トレンチの断面を削り、分層と断面測量、写真撮影をする。16トレンチには木杭が少量出土している。
- 11月29日（金）～12月2日（月） 都合により室内作業。
- 12月3日（火） 8トレンチの断面測量を終える。造り方測量のグリッドを設定する。16～19トレンチのベンチマークの移動をする。
- 12月4日（水） 雨のため、室内作業。
- 12月5日（木） 8トレンチの断面・平面写真撮影。全体測量のレベル入れを行う。
- 12月6日（金） 8トレンチの土層注記を行う。粘土質シルト層の上に木杭列を伴う2層の黒色土層を確認する。
- 12月9日（月） 立会調査のため、現場作業は休み。
- 12月10日（火） 8トレンチ木杭列の造り方測量を行う。都合により半日で現場作業を終了する。
- 12月11日（水）～13日（金） 都合により現場作業は休み。
- 12月16日（月） 8トレンチの造り方測量を行う。レベル入れを残して終了する。
- 12月17日（火） 現場付近の立会調査と8トレンチ木杭列のレベル入れを行う。木杭の数は200本以上で、しっかりと打ち込まれていることも確認された。
- 12月25日（水） コンテナハウスを撤収して、現場作業のすべてを終了した。

平成15年度

- 11月18日（火） 本年度の調査は現道の両側が対象となる。安全面、交通量などを考慮し、許可をとり、全面通行止めにすることとした。北のトレンチから表土剥ぎに移る。最初のトレンチから木杭列の出土を確認する。
- 11月19日（水） 午前中は重機による掘り下げ。午後よりトレンチの上面確認作業を行う。14年度の続きで北のトレンチより20トレンチとする。
- 11月20日（木） 雨のため、室内作業。
- 11月21日（金） 20～24トレンチの上面確認作業を行う。22トレンチの中央より南側はもう1層下げるため、手掘りで下げる。木杭は粘土質シルト層の直上より出土しているが、横になっているものが多い。出土した土器や植物遺体（核）はレベルを入れて、取り上げる。
- 11月25日（火） 雨のため、室内作業。
- 11月26日（水） 断面削りとトレンチの上面確認作業を行う。21トレンチは上層から礫層が出土している。他のトレンチに関しては、掘り下げが進み、木杭列の確認もできた。木杭はほとんどが横になっている。県埋蔵文化財センターの市川隆之氏に現地でご指導をしてい

- ただく。
- 11月27日（木） 21トレンチの断面測量と断面写真撮影。その他のトレンチは、上面確認作業を行う。
- 11月28日（金） 各トレンチの上面確認作業を進める。トレンチごとの違いを確認。悪天候のため、現場作業は半日で終了する。
- 12月1日（月） 写真撮影の予定だったがトレンチ内の状態が悪く、現場作業は中止した。
- 12月2日（火） 20・23トレンチの写真撮影の準備と21・23トレンチの写真撮影。21トレンチの平面測量とレベル入れを行う。
- 12月3日（水） 20・22トレンチの断面写真、遺構平面写真、状況写真撮影。23トレンチの断面・平面測量、24トレンチの掘り下げを行う。
- 12月4日（木） 20・22トレンチの断面測量、23トレンチの断面・平面測量。22トレンチに造り方測量のためのグリッドを設定。24トレンチの掘り下げを行う。
- 12月5日（金） 20トレンチの断面測量を終了。23・24トレンチの断面・平面写真撮影。22トレンチの造り方測量のためのグリッド設定、造り方測量・土層注記、20・22トレンチの全体測量を行う。
- 12月8日（月） 24トレンチの断面測量と平面測量および全体測量。23トレンチ出土遺構の精査のため、掘り下げ。20トレンチの土層注記。20トレンチに造り方測量のためのグリッドを設定する。
- 12月9日（火） 24トレンチの平面測量とレベル入れ。20トレンチに造り方測量のためのグリッドを設定。22トレンチの造り方測量を行う。
- 12月10日（水） 23トレンチの掘り下げ。レベル入れと掘り下げた部分の断面測量。20トレンチの造り方測量のためのグリッドを設定。22トレンチの造り方測量、木杭の取り上げとレベル入れを行う。
- 12月11日（木） 20トレンチの造り方測量、22トレンチのレベル入れ、木杭の取り上げを行う。現場作業は午前中のみ。
- 12月12日（金） 午後より現場作業。20トレンチの造り方測量、レベル入れを行う。
- 12月15日（月） 20トレンチのレベル入れ、木杭の取り上げ。ベンチマークの移動を行う。道路の東側の調査に移る。重機による表土剥ぎの後、上面確認作業を行う。
- 12月16日（火） 道路の東側は南より25トレンチ、26トレンチとする。道路西側の23トレンチとの関係を見るため、25トレンチの南端を深く掘り下げる。植物遺体（アシ?）、木片を含む腐食土層が厚く堆積していることを確認する。
- 12月17日（水） 25トレンチの断面・状況・全体写真撮影、平面・全体測量、レベル入れ。26トレンチの掘り下げ、断面測量を行う。
- 12月18日（木） 25トレンチの平面測量、レベル入れ、トレンチ南端の下層の木片の取り上げ。26トレンチの断面・状況・全体写真撮影、平面・全体・断面測量を行う。現場作業の終了に向けて道具等の片づけも始める。
- 12月19日（金） 26トレンチのレベル入れ、土層注記。道具の撤去を行い、午前中で現場作業のすべてが終了する。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

箕輪遺跡の所在する箕輪町は、伊那盆地の北部に属している。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼ばれている。それは次のような理由から来ている。

伊那盆地は、中央・南の両アルプスに囲まれて南北に細長い形をしているが、長野盆地や松本盆地などと比べると盆地内の扇状地堆積物の厚さが薄く、段丘崖によって山地変換線から盆地中央部の盆地底まで階段状の地形をしている。その盆地底から、天竜川両岸の山までは、まさに「伊那谷」というべき独特的の景観をしている。

以前は伊那盆地を作りあげている盆地底まで続く階段状の地形は、天竜川によって造られた河岸段丘と考えられていたが、現在では地形の研究が進み、河岸段丘ばかりではなく、活断層の影響で盆地の中



上空より遺跡地を望む（調査前）

央部まで階段状の段丘崖が続いている構造盆地であることがわかつてきた。

伊那盆地の盆地内部には伊那谷中央断層と呼ばれる断層があり、中央低地帯と呼ばれる盆地底を形成している。天竜川はこの中央低地帯を流下していて沖積低地を造っている。箕輪町を含む上伊那北部では、天竜川本来の段丘はこの中央低地帯に沿って形成されていて、最低位段丘には天竜川によって運搬されたとみられる円礫層が載っている。この面は2万年前の最終氷期最寒冷期の氾濫面に相当すると考えられる。

天竜川の東は「竜東」と呼ばれ、西は「竜西」と呼ばれているが、箕輪町は天竜川によって竜東と竜西には二分された形になっている。どちらの地域も伊那谷の他地域と同じような地形を形成しているが、竜東と竜西では地形の出来かたが違っている。

竜東では低山性の丘陵が天竜川近くまで迫り、支流による小規模な扇状地が形成されているため、比較的变化に富んだ地形をしている。

一方竜西では、帶無、深沢、桑沢の各河川の複合扇状地により、盆地低においては広く平坦な地形が造り出されている。また、1万2千年以降には、主に支流が天竜川に合流するような場所に、「クロボク」と呼ばれる黒色腐植土層の中に広域テフラである鬼界アカホヤテフラを含んだ最新の地形面が作り出されている。

このような中にあって箕輪遺跡は竜西に属しているが、扇状地上ではなく天竜川による沖積低地に立地している。

この沖積低地にある箕輪遺跡は隣接している南箕輪村まで続くおよそ100ヘクタールの大遺跡として捉えられているが、遺跡の地形は天竜川の自然堤防によって、自然堤防上の微高地、自然堤防内側の氾濫原、自然堤防外側の後背湿地とに分けることができる。自然堤防上の微高地は集落として、自然堤防の内側および後背湿地は水田として利用されていたと考えられる。

又、遺跡地一帯は、段丘下や遺跡内から湧く清水や小河川によって水が大変豊富であり、昭和27年の土地改良事業が行われるまでは、天竜川近くは広くアシ原が形成されていたといわれている。事実、今回の発掘調査地においても現地表面から深さ2mほど下に、アシとみられる植物遺体が圧縮された状態で見つかっている。

15年度の調査地は、本来の自然堤防内側の氾濫原に立地しているが、遺跡近くに「古川」と呼ばれる天竜川の旧河道が推定されている。遺跡地の堆積土層は、沼地化によるシルト層と天竜川によるものと思われる砂礫層が重なり合っているのが観察できる。場所によっては何層にも重なり合っていて、「暴れ天竜」と呼ばれた天竜川の氾濫のすごさを物語っている。

現在遺跡地は土地改良事業によって、均一的に平坦な地形が広がっているに過ぎないが、「曾根田（ソネ＝長く低く続く崖）」、「穴田」などと呼ばれる小字名の存在や発掘調査地内の土層観察により、もっと起伏に富んだ地形をしていたことがわかる。

いずれにせよ、上伊那を含めた伊那盆地の地形・地質の研究は進んできているが、箕輪町内において今日まで広域的な地質調査や地形研究が行われた例はあまり無く、まだ未解明の部分が多いのが事実である。特に地質調査においては、埋蔵文化財調査や公共工事をはじめとした各建設工事の際に行われるボーリング調査によって一端をうかがえるだけで、また、それら全部を把握出来ていないのが現状であり、箕輪遺跡についてもその例に漏れない。

遺跡調査地は、国道153号線のバイパス建設にともない、大型店舗の出店など遺跡地内の開発がさらに加速するのは容易に推測できる。そのため、遺跡内容の解明のためにも、遺跡地の地形および地質に対する研究も進めていかなくてはいけないだろう。しかし、それには箕輪遺跡を含めた箕輪町内の広域的な調査が望まれるものであり、断片的に行われている各調査の調査結果を取りまとめるためにも関係機関との連携が不可欠である。

第2節 歴史環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など豊かな水源に恵まれ、先史より人が暮らしやすい格好の場が多い。また、町内には先人たちが残した足跡ともいいくべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯として知られている。

箕輪遺跡は昭和27年より3年間にわたり行われた土地改良事業によってその存在が確認された。土地改良事業中といふこともあり、発掘調査の実施までには至らなかったが、その状況は箕輪史研究会によって克明に記録され、多くの出土遺物は小池修兵・小川守人両氏（故人）によって採取されている。今日、本遺跡の存在は両氏の多大な努力なくしては語れないところである。

遺跡地は大清水・小清水・苦谷・馬場・御室田・鍛冶屋垣外・城安寺・穴田・渋田・曾根田・久保下等の多くの小字によって区分される。採取遺物は有舌尖頭器、繩文中・晚期土器をはじめ、弥生中期前半・中期後半・後期の土器石器、古墳後期の土器類、須恵器、内黒杯、灰釉陶器、中世（カワラケ・内耳鍋）・近世陶磁器まで時代の幅が見られる。また、時期は不明であるが田舟、田下駄、木製鉢・鋤などの農耕具の他、矢板や數万本に達すると思われる木杭が出土しており、水田經營を裏付けるものと言えよう。やはり時期は不明であるが大清水地籍から出土した木製人形・馬形・木串類、御室田地籍より多量に出土した高杯は、水田經營に關係するであろう祭祀的遺構の存在が予測された。

以後の調査状況は、30年後の昭和55～57年にわたって、国道153号線箕輪バイパス工事に伴う発掘調査が実施された。特に昭和57年における第3次調査では、水田跡とそれに伴う道路を確認することができた。水田は方形で、木杭を打ち込んで畦畔を造っており、水田の水の出入口と思われる施設の存在も確認された。また、昭和58年には、南箕輪村との境にある田中城跡の発掘調査を行ったが構築規模を想定できるような遺構の存在は確認されなかつた。平成2年には、木下区公民館建設に伴う試掘調査が国道バイパス153号線大清水地籍において行われた。過去において多くの土器類、木製人形・馬形・木串が出土した地点ではあったが、木下公民館建設予定地は低位段丘下で、全般的に天竜川の洪水等の繰り返しによる比較的不安定な土地条件のため、遺物および遺構の検出はなかつた。また公共下水道事業終末処理場設置に関して城安寺地籍の発掘調査を行い、木杭列を伴う水田遺構の検出と、現堤防の築かれる以前の、天竜川に隣接する一帯における稻作の実態が確認された。また、平成12年の調査では古墳時代の壺を伴つた水路状遺構や水田遺構も出土している。

平成4年には、遺跡で一番南に位置する南箕輪村中田地籍において、約7,000m²にも及ぶ面積の発掘が行われ、南北約80mにわたり5,000本もの杭が打ち込まれている水路状遺構や暗渠施設などが検出された。平成4・5年に行われた主要地方道伊那辰野（停）線と、国道バイパス153号線とを結ぶ「県道美

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代						立地	地目	備考		
			旧	縄	弥	古	奈	平	中	近			
98	箕輪	木下・三日町		○	○	○		○	○	○	平地	宅地・畠	昭和55~57年、平成4~5~12年発掘調査
219	田中城	三日町						○			平地	田	昭和58年発掘調査
84	上の林	木下	○	○			○				段丘突端	宅地	昭和55~57年、平成4~5年発掘調査
85	北城	*		○	○			○	○		段丘突端	宅地	昭和52年発掘調査
86	南城	*		○	○			○	○		段丘突端	宅地・畠・田	昭和51年発掘調査
87	築城	*			○			○			段丘突端	宅地・畠	昭和49年発掘調査
88	鳳城	*		○				○			段丘突端	宅地・畠	
89	天王	*		○	○	○		○	○	○	段丘突端	宅地・畠	
90	西垣外	*	○				○	○			扇央	宅地・畠	
91	芝宮	*				○	○				扇央	宅地・畠	
92	上野町	*		○			○				扇央	宅地	
93	中野町	*			○		○	○			扇央	宅地	
94	下野町	*	○				○				扇央	宅地	
95	苦谷	*		○	○	○		○			扇端	宅地・畠	
96	鐵治屋垣外	*		○	○		○				扇端	宅地・畠	
97	馬ば場	*		○	○	○		○	○		扇端	宅地・畠	
172	北垣外	福寺	○	○			○	○			段丘突端	宅地・畠	
173	卯の木	*	○		○		○				段丘突端	宅地・畠	
174	黒津原	*		○	○	○		○	○		段丘突端	畠	
175	上金	*		○	○			○			段丘突端	畠	
176	矢田	*		○	○	○		○			段丘突端	畠	昭和61年発掘調査
177	矢田	*		○	○			○			段丘突端	畠	
211	箕輪城	木下						○			段丘突端	墓地・林	

「第一箕輪バイパス建設工事」に伴う発掘調査では、自然堤防によって分離された後背湿地帯において、およそ2,000本もの木杭を要した水路状遺構が検出されており、中・近世の水田経営の実態が明らかになった。

平成12~14年には県埋蔵文化財センターに依頼して国道153号線バイパスの発掘調査が行われた。調査の結果、①これまで箕輪遺跡内に存在が想定されながらも具体的な場所が確認できなかった集落遺構が具体的に明らかになり、弥生中期後半、後期初頭、古墳時代後期の3時期の住居址を検出した。②箕輪遺跡内では古墳時代には河道跡低地を中心に水田化されていたが、河道跡が埋没するに従って、微細な凹凸地形の高低差が減少し、水田域も広がってくることが明らかになった。③古墳時代の水田跡の木芯畦跡はこれまで長野県内で発見されている水田跡と同じ構造であることが確認された。(市川隆之氏まとめ引用)

このように、低湿地遺跡とされる箕輪遺跡においても、こうした埋没微高地を中心に集落の営まれていたことが徐々に解明されてきた。

次に、本遺跡の周辺遺跡についてであるが、西に位置する段丘上に連なる遺跡群と、北の段丘下に位置する遺跡群がある。発掘例を中心に、これらを概観してみる。まず前者についてであるが、北より上

の林(84)、北城(85)、南城(86)、猿楽(87)と続き、各遺跡で発掘調査が行われ、縄文、弥生、平安時代の集落址の一端が確認されている。特に、北城遺跡からは、17軒に及ぶ弥生時代後期の住居址群を確認し、段丘下に広がる水田経営が行われた箕輪遺跡との関連性を大いに伺う事ができた。後者については、段丘下には帶無川の扇状地が広がり、中でも扇央に位置する柴宮(91)、上町(92)、中町(93)、下町(94)、渋谷(95)、扇端に位置する鍛冶屋垣外(96)、馬場(97)は祭祀用の木串が出土した箕輪遺跡の大清水地区に最も近く天竜川による水害も受けていない可能性を小池修兵氏は示している。また、遺跡詳細分布調査においても平安時代の土器を中心に多くの土器が採取されている。

以上、本遺跡とそれを取り巻く遺跡について概観してきたが、今まで疑問視されてきた生産地と集落という関係が解明されてきたことは、箕輪町の歴史と箕輪遺跡との関連を見つめていく上で重要な成果となるであろう。



第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

第Ⅲ章 調査結果

第1節 調査方法と結果概要

今回の調査地は、箕輪遺跡の東側を南北に縦断する町道503号線拡幅工事に伴うもので、全長約600m、総面積600m²で天竜川の堤防まで100m位のところに位置する。調査は平成14・15年度にわたって行われ、調査の手順としては重機によるトレントレンチ掘削作業、断面土層観察、遺構上面確認作業、各検出遺構の掘り下げ、土層堆積状況・平面等の測量及び写真撮影による記録作業、遺物の取り上げ、全体測量を行った。なおベンチマークは、調査距離が長いため1~7まで設定し、記録作業における標高を割り出した。遺構の有無と土層堆積状況の確認をするため、26本のトレントレンチを掘削し、トレントレンチによっては一部分を礫層まで深掘した。掘削の結果、各トレントレンチの基盤層までの深度と土層堆積状況に格差がみられ、深いところは20cmあまりで礫層に達し、深いところは礫層まで3m以上あり多層となる個所も認められた。土層の分層は新版標準土色帖（著・編者小川正忠、竹原秀雄）を用い、できるだけ客観的な観察に努めた。なお、バイパス建設関連の立会調査を1箇所行った。

調査の結果、今回検出された遺構は以下のとおりである。

- ・水路・溝状遺構—8トレントレンチ、20・25トレントレンチ
- ・水田遺構・水田畦畔—20・22~26トレントレンチ

第2節 土層堆積状況

今日における調査区を含めた一帯は、昭和27年に始まった土地改良事業によって、大規模に地形の変貌を遂げた。ここでは昭和29年に調整された事業以前の地形を手がかりにしながら、トレントレンチの掘削による土層の観察とその把握を行った。

調査区北部は第6・7・10・12次調査地点の西側に位置し、旧河道西側の低湿地と予想される。1~15トレントレンチ：砂礫層の上に砂質の灰褐色シルト層が載り、その上に水田耕作が想定される黒褐色腐植土層が堆積している。1~6トレントレンチでは灰黄色の粘質シルト層が更に載り、現在の水田の耕土が表土となる。深度50cmまでの土層堆積状況からは、あまり洪水の影響を受けずに水田耕作をしていた様子が伺える。16トレントレンチ：礫層の上に黒褐色腐植土層が載り、現在の水田耕土が表土となる。17トレントレンチ：礫層の上に現在の水田耕土が載り、黒褐色腐植土層は見られない。16・17トレントレンチは礫層までが40~50cmと浅く、微高地と捉えた。18・19トレントレンチ：礫層の上に黄灰色粘土質シルト層が70cmほど堆積している。形成時期の新しい河道低地と捉えた。その上に水田耕作が想定される黒褐色腐植土層が堆積し現在の水田の耕土が表土となる。20~26トレントレンチの東側には旧天竜川の中洲状微高地と思われる高まりが所在する。20トレントレンチは礫層、黄灰色粘土質シルト層、黒褐色腐植土層と堆積しているが、その上に洪水による砂礫層が載っている。21~22トレントレンチ中央までは黒褐色腐植土層が一部確認されているものの、砂礫層の上に現水田の耕土が載り、凹凸地形の凸部（小規模な微高地）と思われる。24トレントレンチでは黒褐色腐植土層が2面確認されている。25トレントレンチでは現水田面より1.6m下に天竜川の旧河川敷と思われる流木やアシなど植物遺体の堆積層が確認され、その上に砂や粘土質シルトが堆積し、さらに黒褐色腐植土層が載っている。従って、今回の調査地は天竜川の洪水と、西山山麓から流れる中小河川の堆積と浸食作用により、凹凸地形ではあるものの一帯が低湿地で水田耕作が継続して行われていたと思われる。



第3図 地形図・調査区設定図 (1:5,000)

第Ⅳ章 遺構と遺物

第1節 検出遺構

今回の調査地は、遺跡の東側を南北に継断する町道503号線の拡幅工事に伴うもので、全長約600m、総面積600m²において、幅1mの細長いトレンチを26本開け（第9図）、水田遺構や水路状遺構を検出した。

水田遺構1（第10図）

位置：調査区の北部、8トレンチ水路状遺構1の南側に位置する。東には天竜川との間に城安寺地籍といわれる中洲状微高地が帯状に広がる。検出土層：6層上面の黒色土層を水平に精査し、南から続いている黒色土層を水田の耕作土として捉えた。規模・構造・方向：畦畔の検出がないため不明。遺物出土状況：水路に接して杭列と横倒しになった木杭が多く出土した。6・8・9層より須恵質長頸瓶が2片出土しているが、いずれも水路状遺構1に近く、水路からの流れ込みとみられる。上面確認では近世の灯明皿、カワラケ、内黒の坏、高杯皿部が各1片出土している。時期：水路状遺構1と同時期の中・近世と捉えた。

水田遺構2（第6・11・12図）

位置：調査区の南部20トレンチに位置する。検出土層：5層黒褐色シルト層を水田の耕作土として捉えた。規模・構造・方向：水路状遺構2の北側に位置する水田遺構には踏込み遺構が確認され、水路状遺構2との間に基部を礫や木杭で補強した畦畔が検出された。水路状遺構2の南側は畦畔と思われる灰色シルト層と踏込み遺構が断面より確認され、6.5m南からは微高地を示す礫層が21トレンチへと続く。遺物出土状況：実測はしていないが、北側の水田面より近世の灯明皿が、また石果類としてモモの核が出土している。また、上面確認でいずれも破片であるが黒曜石、高杯や小破片のため器種不明の土師器、須恵器の壺、茶碗・茶壺の陶器類が出土している。時期：検出土層から中・近世と考える。

水田遺構3（第6・11・13・17・20・21図）

位置：調査区の南部22トレンチの中ほどより南に位置する。検出土層：3層黒褐色シルト層を水田の耕作土として捉えた。2・3層の間は明確な分層線が引けなかったことから、耕作が連続して行われていたと考えられる。5・8層の間には水田耕作後に繁茂したアシ類の植物遺体が圧縮されている。規模・構造・方向：21トレンチと22トレンチの北から8mまでは礫層の堆積が上昇しているので、微高地と考えられる。水田と微高地の境目には太めの丸木（第20図-5・6）が使用されており、畦などの補強がなされたものと思われる。水田の規模は調査範囲が幅1mと限定されているため確認できなかった。遺物出土状況：横倒しになった木杭70本が8層の上面に出土した。実測した木杭20本のうち（第21図-20）には手斧で削ったような削り痕がみられ、図にはないがNo.12は桶を転用した木杭で頭部より40cmほどの所に、礫の痕がみられ、今回出土したうちでは1本のみが転用材である。また保存をよくするために表面を炭化させて使用しているものもある。樹種は水に強く年輪がはっきりしているサワラが半数以上を占めクリもわずかながら使用している。3層下部から出土している土器にはカワラケ（第17図-13）、内耳鍋（第17図-15・16）、中近世に比定する陶器の碗（第17図-21）がある。時期：検出土層と出土遺物から中・近世と考える。

水田遺構4（第7・11・14・17・20図）

位置：22トレンチの水田遺構3に続く23トレンチ出土水田遺構。検出土層：3・5・7層黒褐色シルト層

を水田の耕作土として捉えた。規模・構造・方向：北より6mの地点より幅3.2m、長さ1.3m、高さ0.25mの畦畔が出土した。畦畔の両側縁には蔓性の樹種の丸木（第20図-7・8・9）を數き芯材として用いた木芯畦として構築されている。出土した部分からは蹠を詰めた形跡は認められないが、畦畔としては幅も広く、農道としての機能を持たせたものであろうか。この畦畔北側に位置する水田遺構では、耕作時に残された無数の踏込み遺構が検出された。畦畔南側では、5・7層耕作土は北側の水田遺構と同時に確認されたものの踏込み遺構は少ない。遺物出土状況：畦畔覆土より火縄鉄の玉が出土した。土器ではいずれも破片ではあるが5層より土師器、須恵の壺、瀬戸大釜の擂鉢、陶器の碗（第17図-22）、伊万里焼の碗（第17図-24）が出土している。時期：検出土層から中・近世と考える。また、23トレンチの北に入れた試掘坑断面下層からは他時期の耕作土と思われる黒褐色土層1層を確認した。

水田遺構5（第6・11・14・17図）

位置：24トレンチ出土水田遺構。検出土層：4・5層黒褐色シルト層を水田の耕作土として捉えた。規模・構造・方向：土層断面2個所に擬似畦畔がみられる。南側に位置する擬似畦畔から南では踏込み遺構の凹凸が特に顕著であった。遺物出土状況：古墳後期の高杯（第17図-5）をはじめ高杯の破片や須恵器の壺（第17図-6）など土師器、須恵器、杯類の出土量が多かった。時期：時期を確定する根拠に乏しいが出土土器から古墳後期とも考える。

水田遺構6（第7・11・15・20図）

位置：25トレンチ出土水田遺構。検出土層：3層黒褐色泥炭質シルト層を水田の耕作土として捉えた。規模・構造・方向：検出土層3層は土地改良工事の時に削平されているため、水田面の耕作土は殆ど残らず、遺構のみの検出である。溝状遺構1の両側に踏込み遺構を伴う水田遺構を検出した。試掘坑をトレンチの南側に入れた。道路敷から2m下には粘土層や、アシなど未分解有機物と流木を50%以上含む砂質シルト層が検出され、その下に大蹠の礫層が堆積しており、古河（旧天竜川河道）跡と捉えた。遺物出土状況：丸木の木杭（第20図-10）は、鋭利な刃物で何回も打撃を加えて先端を削り出している。土器の出土は無い。時期：道路を挟んだ22・23トレンチとはほぼ同一レベルであり、同時期と考える。

水田遺構7（第7・16・17図）

位置：26トレンチ出土水田遺構。検出土層：5層黒褐色シルト層を水田の耕作土として捉えた。規模・構造・方向：検出土層5層は土地改良工事の時に削平されているため、水田面の耕作土は殆ど残らず遺構のみの検出である。トレンチ北側は蹠層が検出され、微高地と思われる。遺物出土状況：土師器、灰釉陶器、天目茶碗、内耳鍋、端返皿（第17図-14）などの破片が出土している。木杭の出土は無い。時期：道路を挟んだ20トレンチの水田面とほぼ同一レベルであり、同時期と考える。

水路状遺構1（第8・10・17・19図）

位置：8トレンチの北寄りに位置し、南側には水田が営まれていたものと思われる黒色土層が続く。規模・構造・方向：幅1.8mから2m、深さ0.5mであるが、杭列間の幅は0.8m～1mで、溝の両縁部に0.3～0.5mのほぼ一定した幅で杭を断面「ハ」の字状に隙間なく打ち込み、水路の袖を構築している。さらにその外側の湾曲部には長い木杭を軸用した横木が配置され、拳大から人頭大の石が充填され袖の湾曲部分の構造を強化している。袖の部分には横木や石を覆う盛土があったと思われる黒色シルト層4層が載っている。この工法は、「箕輪遺跡第8次緊急発掘調査」において出土した水路状遺構と同じ方法であり、やはり沼などが広がる湿地帯に水田を営むための工法で、同一時期に構築された水路の可能性が高い。流路は北西から流れ、この地点で南に湾曲し、水田面との比高差は最大0.33mである。なお、検出された水路の東に現在幅2.6mの水路が流れている。昭和27年の土地改良事業の際にも木杭列を伴う

水路が確認されていることが、箕輪史研究会の作成した平面図（第8図）にも記されている。木杭の状況：木杭頭部は欠損している。用材は出土数206本のうち割り材が203本、丸木材が3本で割り材が98%を占めている。樹種はサワラが90%、わずかにクリが用いられている。先端部は金属製の鋭利な刃物により、数回の打撃で尖らせてある。遺物出土状況：須恵質土器の坏（第17図-7・8）、長頸瓶、カワラケ（第17図-12）各1片、石果類としてモモの核4点（第19図-2～5）が水路内から検出されている。時期：限られた範囲のため時期の明言は避けたいが、木杭の樹種と調整方法から水田造構と同時期の中・近世と考える。

水路状造構2（第11・12図）

位置：20トレンチ北側に位置する。規模・構造・方向：幅は2m程で、上部は水田耕地整理の際に削り取られている。水路の南縁部は調査区外に位置するため不明であるが、北縁部は粗朶を敷いたり極薄い板材を組み合わせ、側縁部には大小の円礫を並べて補強している。方向は北方から南流する。水路底部と、南側に位置する水田造構面までの比高差は0.2～0.3mで比高差はわずかである。発掘調査が行われなかった道路部分を除いて、反対側の26トレンチにおいて同造構の検出は無い。木杭の状況：検出された木杭や木材はすべてが横になり、井桁に組み合わされているものもある。構築素材は木杭を取った後の粗朶や、短くて木杭として使用不能な木杭や、極薄い板材を使用している。樹種はクリが50%以上を占める。遺物出土状況：造構からの遺物の出土は無かった。時期：北側に隣接する水田面からは、近世に比定される灯明皿が出土している。中・近世と考える。

溝状造構1・2（第11・15・16図）

溝状造構1は25トレンチ北側に検出された。上部は削平されているため構築状況は不明であるが、北西から南東に流れる。溝状造構2は26トレンチの東側に一部が検出された。ごく一部の検出であるため詳細は不明である。

第2節 遺物

土 器（第2表） 14次発掘調査では、8トレンチより木杭を伴う水路状造構1と水田が検出され、9点の土器片が出土している。他には1・2・7・11～13の各トレンチに1片合計15点の出土状況であった。15次発掘調査では水田や畦畔が検出され土器も多く出土した。しかし、何れも小破片のみの出土であり土器表面の劣化が著しく、調整が明確に観察できない個体が多い。種類と器種分類を第2表に掲載した。出土した土器の総数は80点で、種類別に分類すると弥生時代の土師器1点、古代の土師器21点、須恵器8点、灰釉陶器3点、中世の焼物26点、近世～近代の陶磁器21点であった。中世の焼物の内訳は須恵質土器・（陶器）1点（17）、瓦質土器・陶器1点（11）、土師質のカワラケ7点、カワラケか杯1点、内耳鍋8点、陶器8点である。

弥生時代に比定される土器は13トレンチより1点出土している。小片であり器種は不明である。

古墳時代に比定される土器は11点の出土があり、土師器（4）は高杯の杯部で胎土に長石や雲母を含み、塗彩されている。（5）は高杯の脚部（裾）で古墳後期に比定される。裾部外面はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。土師器ではその他に壺1点、杯1点、高杯3点、高杯か杯1点、器種不明1点が出土している。須恵器（6）は壺で外面には叩き目が施され断面は赤褐色、焼成は良好で古墳時代と捉えた。（10）は壺で外面には叩き目が施され、古墳後期から平安時代に比定される。

平安時代に比定される土器では17点の出土があり、須恵器（8）は自然釉のかかった杯口縁部で、底

部から垂直に立ち上がる。(7) も杯口縁部で底部からほぼ垂直に立ち上がる。(9) は軟質須恵器の杯口縁部である。その他壺か壺1点、長頸瓶で同一固体と思われるもの2点、灰釉で器種は壺か壺であるが判別できないもの1点が出土している。土師器では内黒の杯1点、その他器種不明品として9点が出土している。

中世の焼物26点のうち(12)はカワラケの口縁部で内湾気味に立ち上がる。(13)は底径が大きめで均一な器厚のカワラケで、胎土には赤みを帯びた鉱物が含まれる。その他にカワラケ5点、カワラケか杯1点が出土している。胎土はやや粗い粒子の砂が含まれるものもあるが多くの精製された胎土を使用しており、調整はクロロ調整、焼成は軟質で、色調は明赤褐色や黄橙を呈している。内耳鍋は8点出土している。(15)は口縁部、(16)は底部である。その他に内耳鍋底部3点、胴部3点が出土しており、22トレンチからの出土量が最も多く5点に上っている。陶器は9点出土している。(11)は古瀬戸の卸皿で、無施釉・軟質で鎌倉時代に比定される。(14)は瀬戸大窯1期の端返皿口縁部で、(17)は錫釉施釉の擂鉢である。その他に表裏面に鉄釉施釉の茶壺1点、瀬戸美濃の灰釉陶器2点、灰釉であるが器種は判別できないもの2点、黒釉施釉の天目茶碗1点が出土している。

近世～近代の焼物では、21点の陶磁器が得られた。得られた量は少ないが調査区全域から出土しており特に22トレンチからの出土が多かった。また小破片の為、詳細な識別が不能なものが多い。陶器の产地は識別できなかった。器種別では陶器について(20)は錫釉施釉の灯明皿、その他に鉄釉施釉の灯明皿1点、丸碗1点、天目茶碗1点、鉄釉施釉碗1点(21)、擂鉢1点、鉢1点、仏飯具1点、土鍋1点、鉄釉施釉後に灰釉を飛ばし掛した碗1点、外面のみ鉄釉施釉の茶壺1点、長石釉施釉の志野焼で器種は不明のもの1点、灰釉施釉で器種は不明のもの1点が出土している。磁器では瀬戸美濃産で近代に比定される染付けの徳利1点、染付けの碗1点がある。その他に伊万里の碗(24)・染付けの碗？(23)・近代の碗・近世以降の皿(22)・近現代の皿が各1点出土している。全般的に小型の食膳具が多く出土した。

国道153号線伊那バイパスの発掘調査地と交差している町道の立会い調査では、30点の土師器片が得られている。(1～3)は弥生中期の櫛描文あるいは沈線文施文の壺である。その他の破片も全て土師器の破片で無文であるが弥生から古墳時代のものだろう。

石 器 黒曜石3点が出土している。1点は加工痕の見られる剥片で、1点は未成品で何れも遺構外出土であり、もう1点は加工痕の見られない剥片で、22トレンチより出土しているが流れ込みの可能性が高い。

金属器(第3表) 3点が出土している。弾丸(1)は火縄銃の弾丸で鉛製である。表面はざらついて凸凹が目立ち、灰白色をしている。23トレンチ畦畔中よりの出土である。他に器種不明の小破片2点が出土している。

石果類(第4表) 食生活や祭祀に深いかかりをもつ植物遺体が出土している。水田跡、溝、水路状遺構とその周辺の遺物包含層から層位的に採取された植物核・モモ核10点とオニグルミ核・ヒメグルミ核各1点であった。

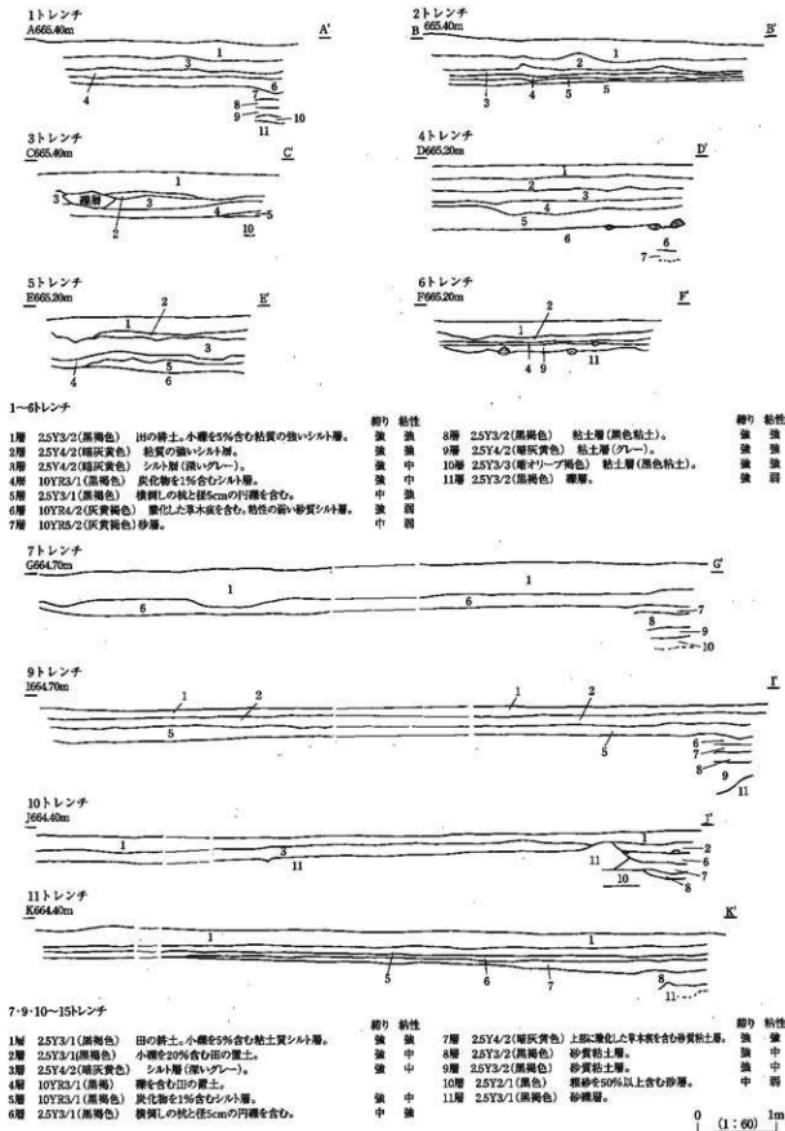
木製品(第5表) 木製品(1)は木形状木製品だろうか。木材を割り、かまほこ状の麦皮面を刀子等で削り両側面も湾曲させて削り出している。また木片の一端は焼け焦げている。22トレンチよりの出土である。

木杭は各トレンチ出土の木杭のうち、出土状態のよいものを36本選んで実測した。先端はすべて鉄器で削られており、断面は台形、方形、三角形、板状で、割り方はみかん割りが多くを占め、半割、丸木

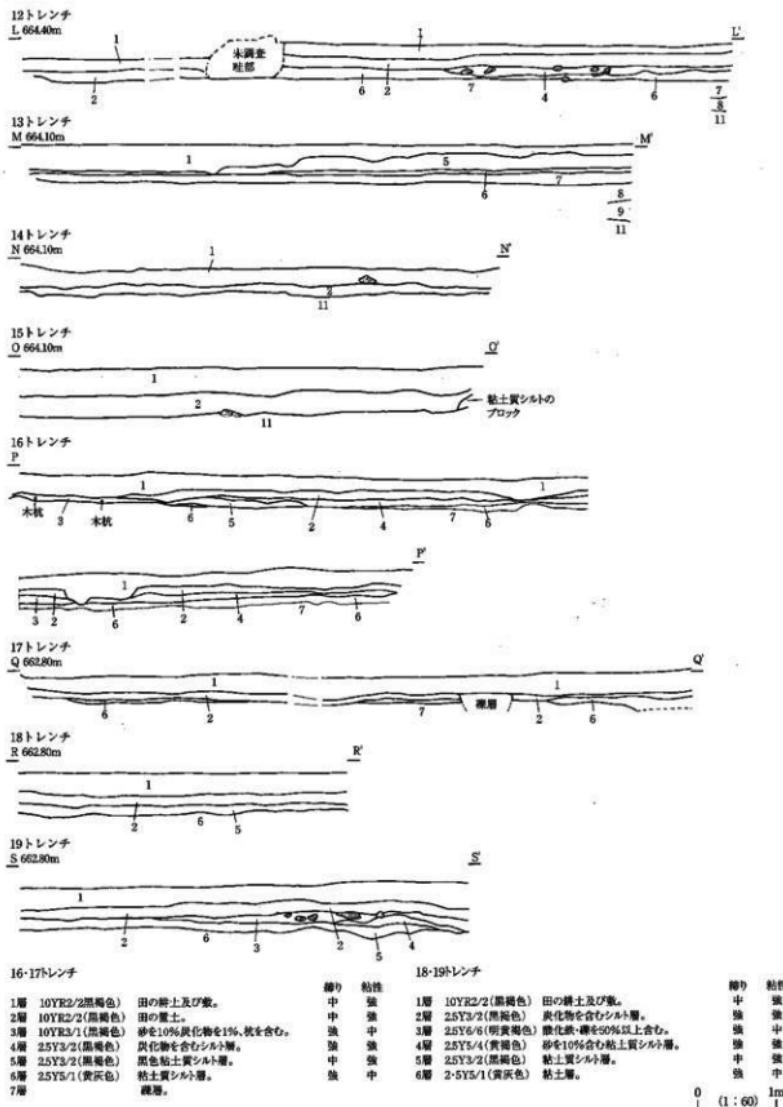
材も使用している。22トレンチからは桶を転用したものと思われる木杭1本が出土している。樹種分析については内田健一氏（岐阜県立森林文化アカデミー森づくり塾助教授）に御指導いただいた。サワラが圧倒的に多く、クリ、アカマツ、モミ、など分類できた。水路状遺構1出土の木杭の樹種は90%がサワラであり、水路状遺構2ではクリが多く、アカマツも見られた。22トレンチの木杭は横だおしになっていたが、遺存状態は良好な木杭が多く、樹種はサワラが主である。8トレンチの水路に打ち込まれていた木杭の層序は水田耕作土と同位であった。

第2表 出土土器・陶器観察表

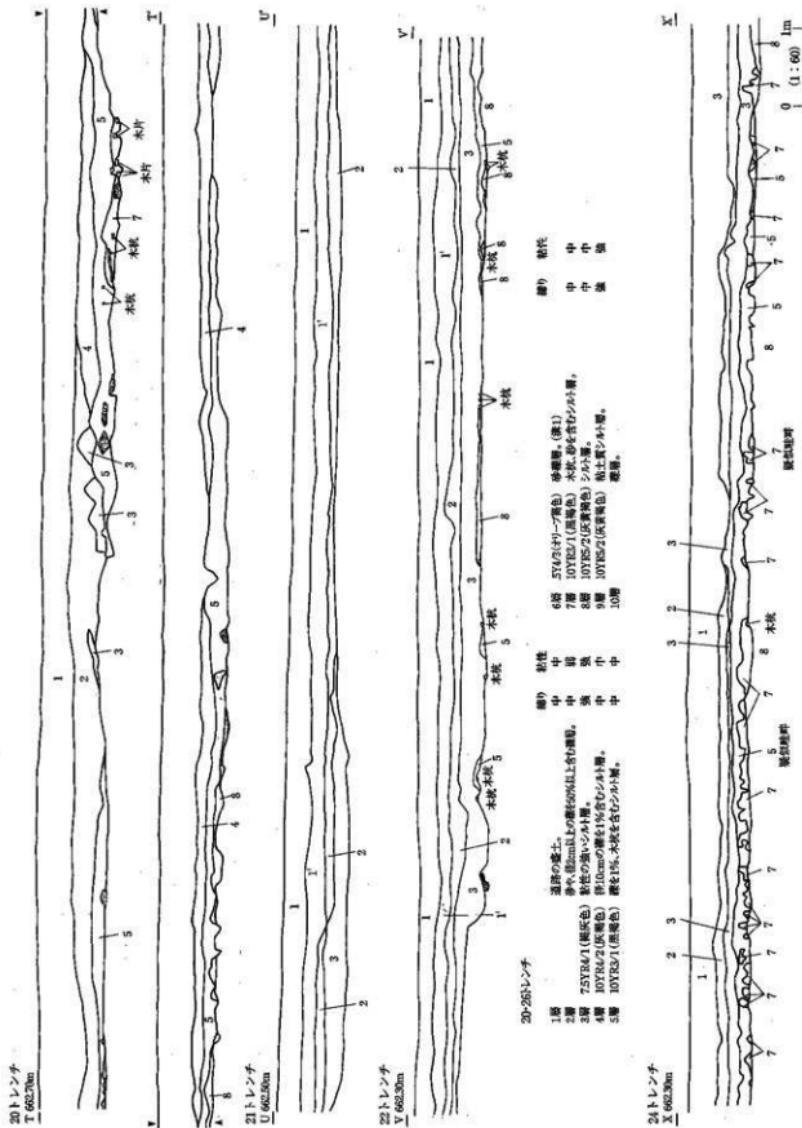
番号	出土地点 土器No.	種類	器種	法量	部位	成形・器形 の特徴	文様・調整	備 考
1	バウタ山	土器	甕	-	肩部	外腹…櫛目文	色調…内外面断面10YR6/3(にぶい黄褐色)	
2	バウタ山	土器	甕	-	肩部	外腹…櫛目文	色調…内外面断面10YR6/3(にぶい黄褐色)	
3	バイパス 立ち合ひ	土器	甕	-	肩部	外腹…丸い縦状の工具 で施文した波線	色調…内外面断面10YR6/3(にぶい黄褐色)	
4	8T9T周 No.4	土器	高杯	口-(10.4)	皿部		丹彩を施す	色調…内外面5YR6/6(橙色) 断面10YR6/3(にぶい黄褐色) 胎土…垂耳…砂粒を多く含む。
5	24T	土器	高杯	底-(11.8)	高杯脚盤部		外腹…ヨコナデ 内腹…ヘラナデ	色調…内外面5YR6/6(明赤褐色) 胎土…砂粒を少量含む。 焼成…良好
6	24T	須恵器	甕	-	肩部		外腹…タキ目	色調…内外面2.5Y5/1(黄褐色) 断面5YR5/2(灰褐色)
7	8T	須恵器	坏	口-(13.4)	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面2.5Y5/2(暗灰褐色)～ 2.5YR5/1(黄褐色)
8	8T	須恵器	坏	LJ-(10.8)	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内腹N4/0(灰色)～N2/0(黑色) 自然釉
9	23T No.14	須恵器	坏	-	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面10YR6/3(にぶい黄褐色)
10	2T JKNo.30	須恵器	甕	-	肩部	ロクロ成形	外腹…タキ目	色調…内外面断面2.5Y6/1(黄褐色)
11	23T	古瀬戸 陶器	鉢皿	口-(11.0)	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面2.5YR7/1(灰白色)
12	8T 6	土器質	カワラケ	-	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…5YR7/4(にぶい橙色)～7.5YR7/4(に ぶい橙色)
13	16T No.22	土器質	カワラケ	-	底部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面断面7.5YR6/6(橙色)
14	26T	灰釉陶器	罐返皿	口-(9.4)	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面5Y6/3(オリーブ黄色) 断面5Y7/1(灰白色)
15	22T No.25	土器質	内耳鍋	-	口縁部		内腹…回転台ナデ 外腹…回転台ナデ	色調…内外面断面7.5YR6/4(にぶい橙色)
16	22T No.8	土器質	内耳鍋	-	底部			色調…内外面断面7.5YR7/4(にぶい橙色)
17	23T	陶器	擂鉢	-	肩部	ロクロ成形		色調…内外面10YR4/1(褐灰色) 断面2.5Y8/1(灰白色)
18	12T	陶器	擂鉢	-	肩部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面5YR4/4(褐色) 断面2.5Y8/2(灰白色)
19	22T	陶器	鉢	口-(14.4)	口縁部	ロクロ成形		色調…内外面5YR(暗褐色)～7.5YR3/1 (黒褐色) 断面2.5Y7/1(灰白色)
20	8T	陶器	灯明皿	口-(10.2)	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面10YR7/1(灰白色) 内外面難辨…7.5YR3/1(黒褐色)
21	22T	陶器	碗	-	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面7.5YR3/4(暗褐色)～7.5YR2/1 (黒色) 断面2.5YR7/2(灰褐色)
22	23T No.21	磁器	皿	-	口縁部	ロクロ成形	内腹…ロクロナデ 外腹…ロクロナデ	色調…内外面10Y8/1(灰白色)
23	24T	磁器	碗	-	口縁部	ロクロ成形	外腹…衆付け	色調…内外面10YR8/1(灰白色) 衆付け部分7.5YR4/4(褐色)～10GY8/1(明綠 灰褐色) 断面10B6/0(灰白色)
24	23T	伊万里 磁器	碗	底-(5.0)	底部高台	ロクロ成形		色調…内外面7.5GY8/1(明綠灰褐色) 断面10Y1/1(灰白色) 衆付け部10BG7/1(明青灰褐色)



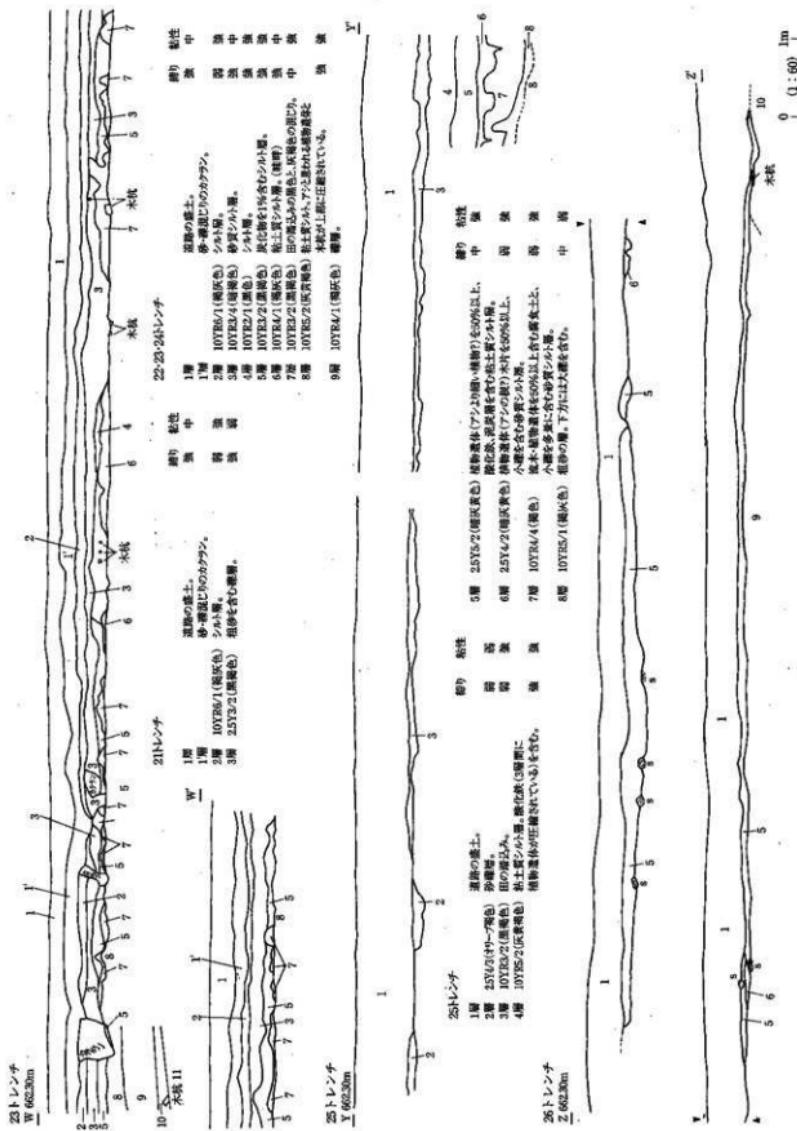
第4図 トレンチ土層断面図



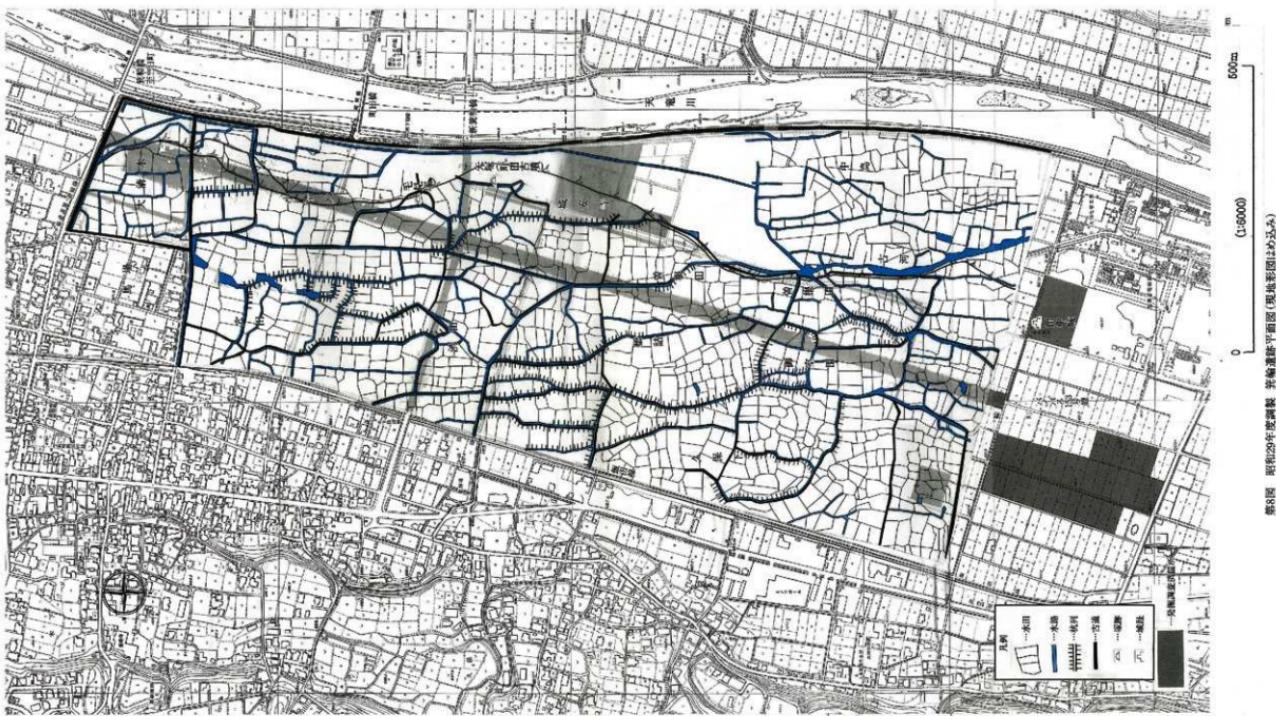
第5図 トレンチ土層断面図

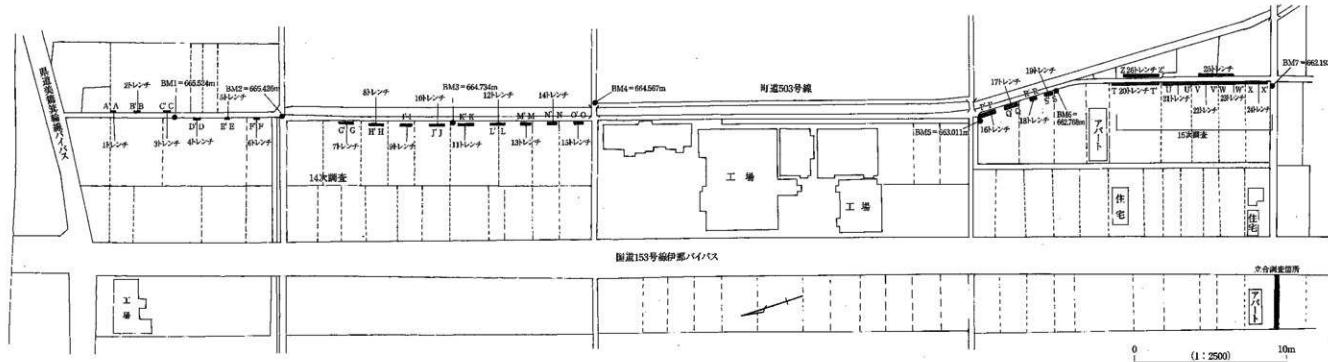


第6図 トレンチ土層断面図

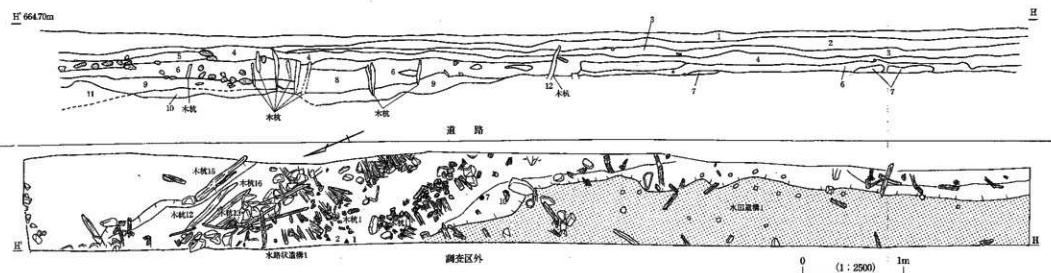


第7図 トレンチ土層断面図



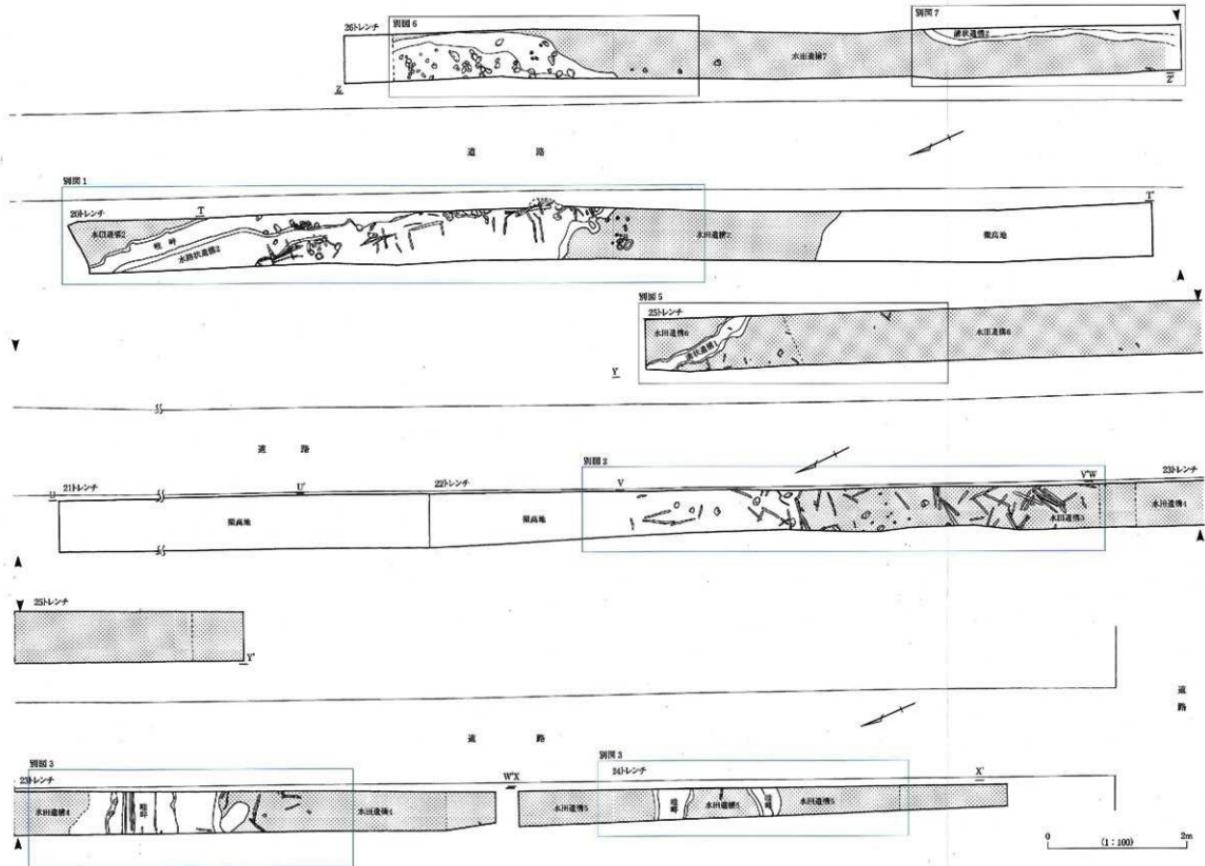


第9図 トレンチ設定図

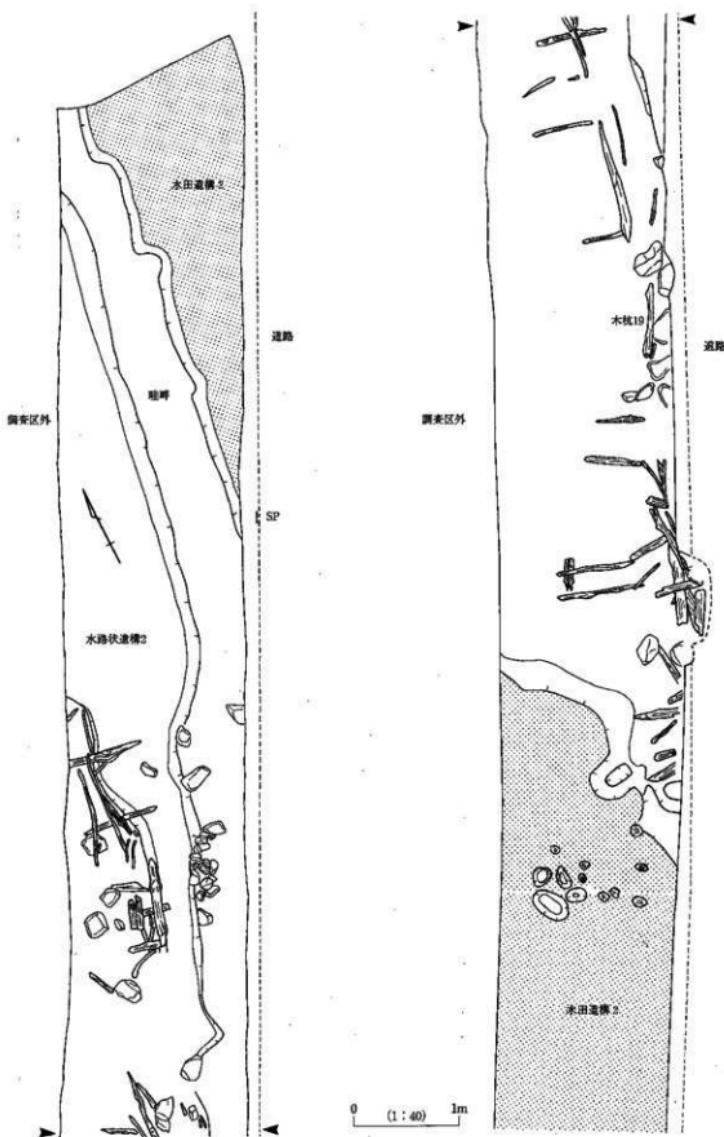


層番	色名	特徴
1番	10YR2/2(黒褐色)	田の土及び底。
2番	10YR2/2(黒褐色)	砂礫多く含む重い土。
3番	10TR3/3(褐色)	風化物多く含む木炭。
4番	25Y3/1(黒褐色)	木炭多く含む砂礫混じた木炭。
5番	25Y3/1(黒褐色)	砂質 木炭10%、良化物23%含む。
	雜層	雜層。(水田小き上げの整地土層)
6番	10YR2/1(黒色)	樹木立った木炭、木炭を含む。
7番	7.5Y3/1(黒褐色)	樹木立った木炭。
8番	25Y2/1(黒褐色)	粗粒-細粒。(大路)
9番	10YR2/1(黒褐色)	粗粒シルト層。
10番	5Y3/1(黒褐色)	砂層。
11番	25Y2/2(暗灰色)	砂質シルト層。

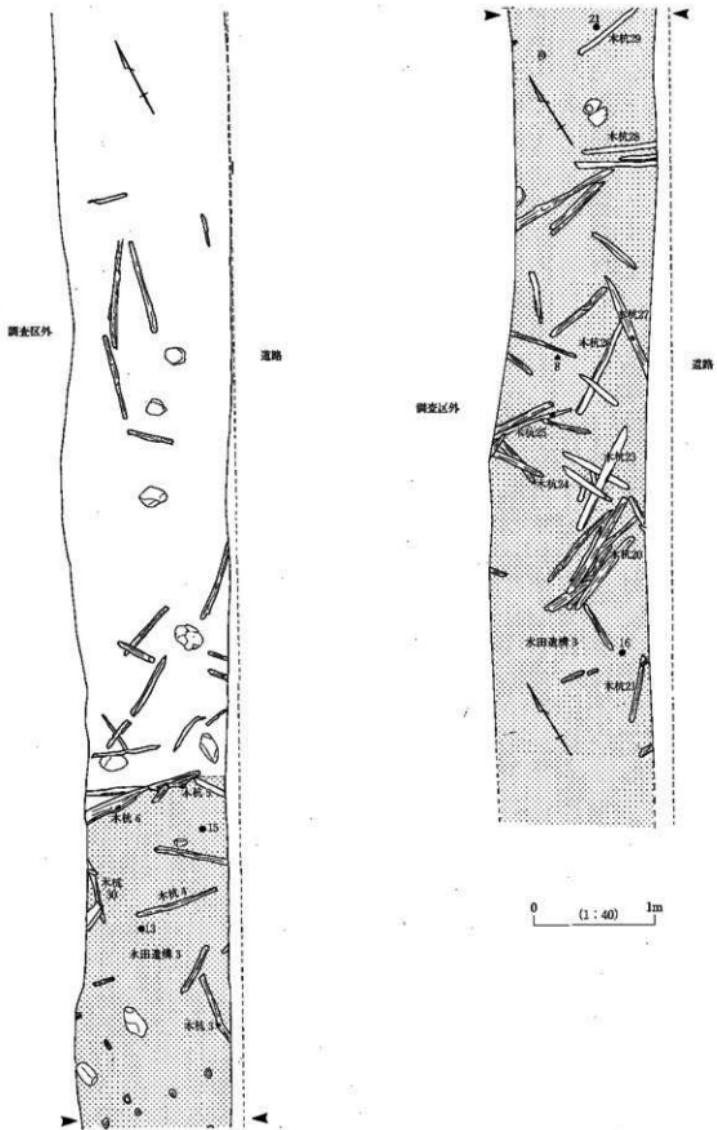
第10図 8トレンチ実測図



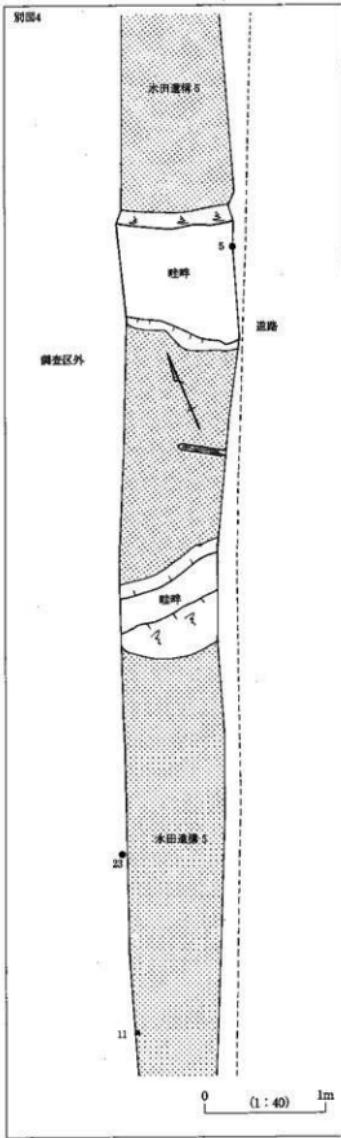
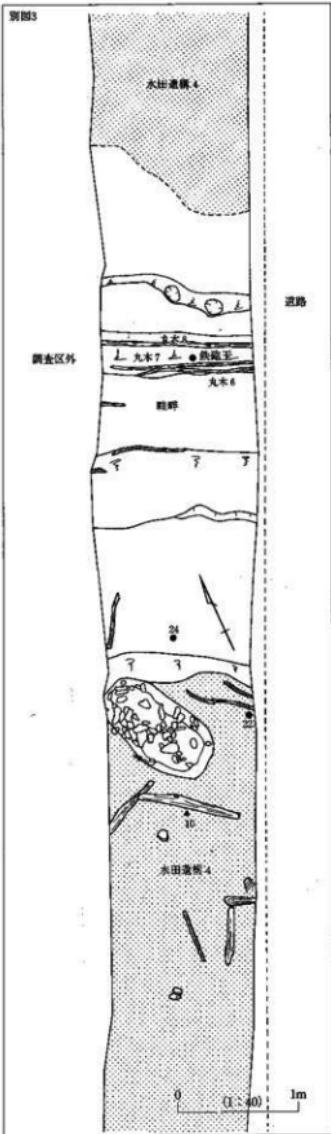
第111図 15次調査区全体図・追根図



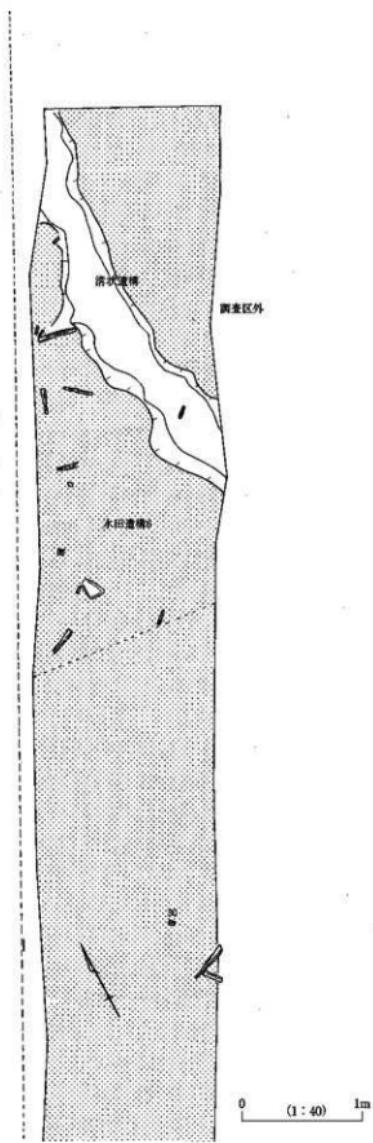
第12図 (別図1) 20トレンチ平面図



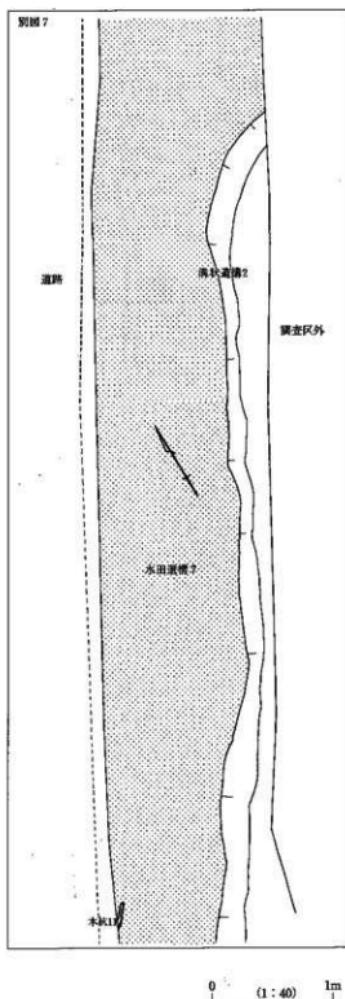
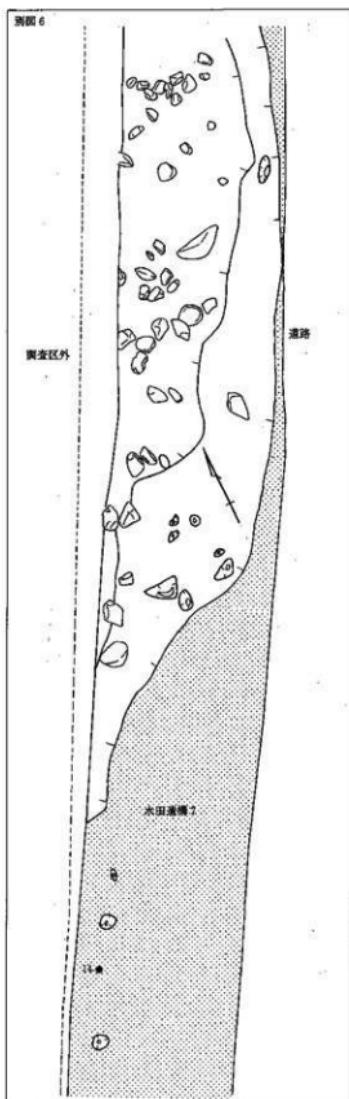
第13図 (別図2) 22トレンチ平面図



第14図 (別図3-4) 23-24トレンチ平面図

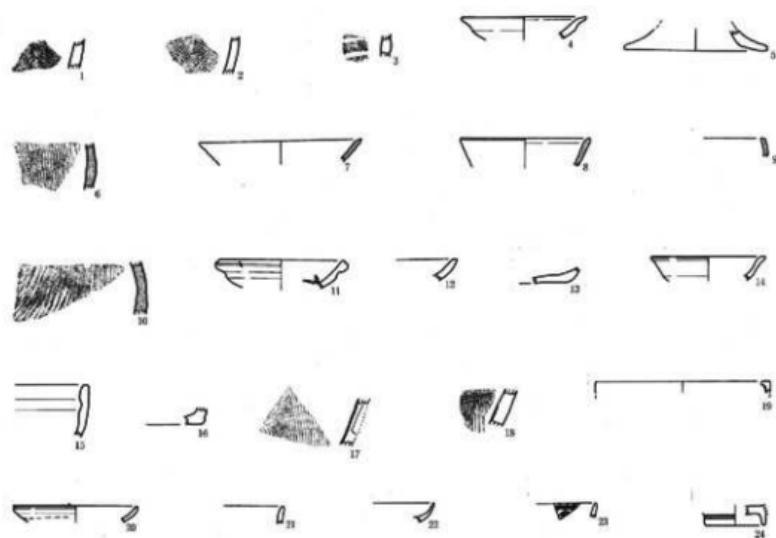


第15図 (別図5) 25トレンチ平面図

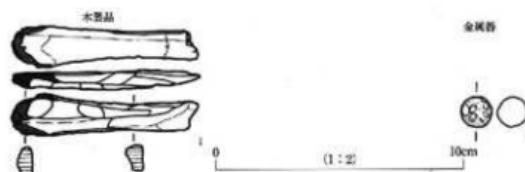


0 (1 : 40) 1m

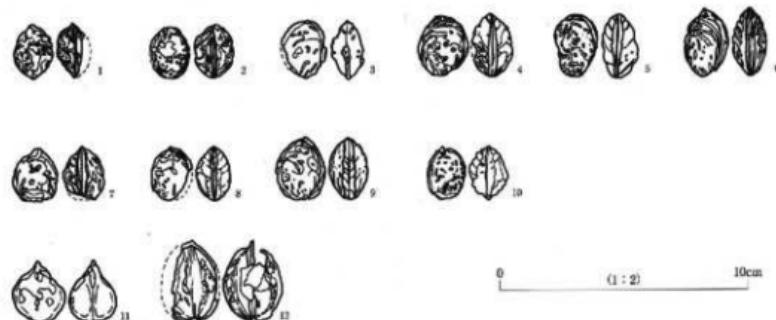
第16図 (別図6-7) 26トレンチ平面図



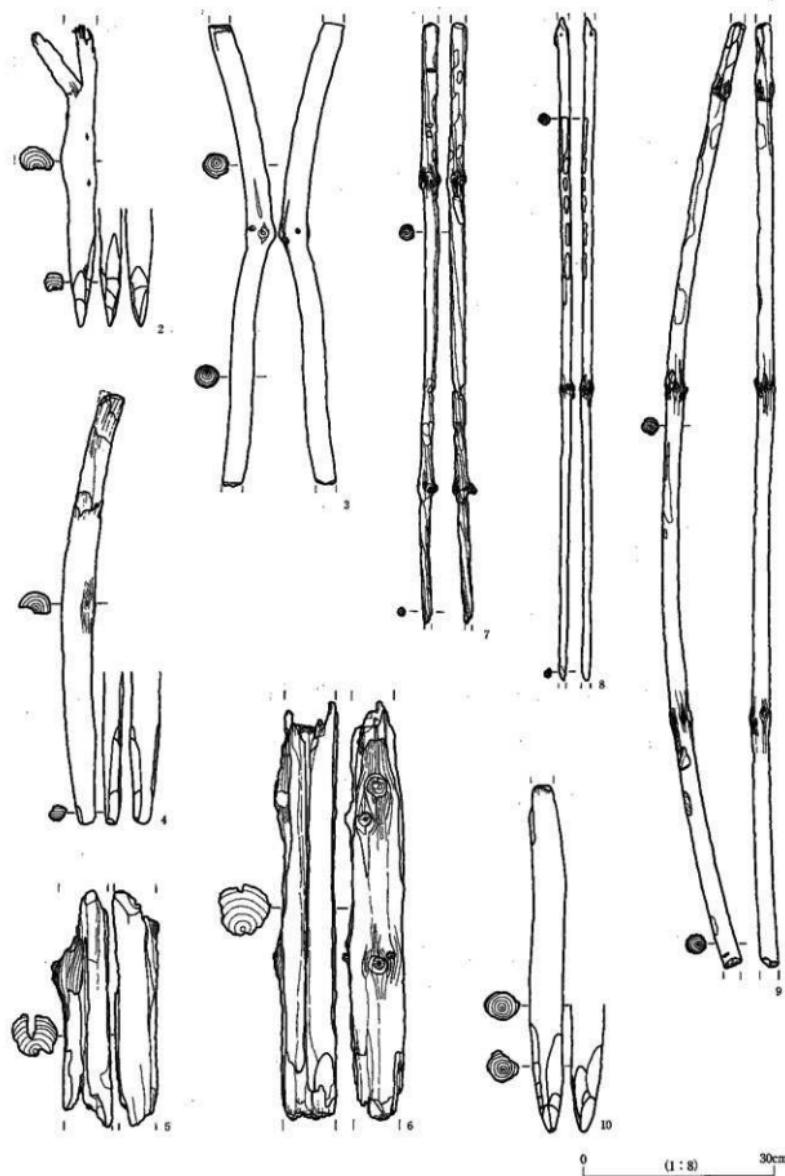
第17圖 出土土器実測図(1:4)・拓影図(1:3)



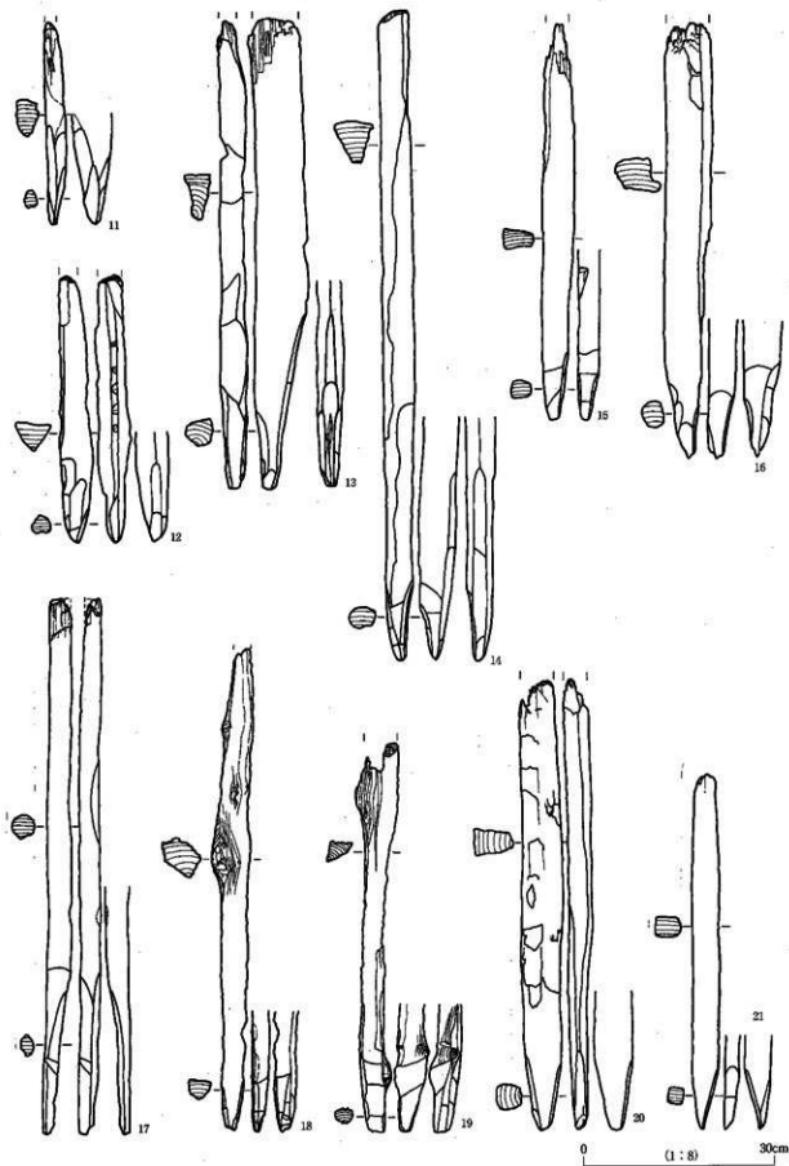
第18圖 出土木製品・金属器実測図



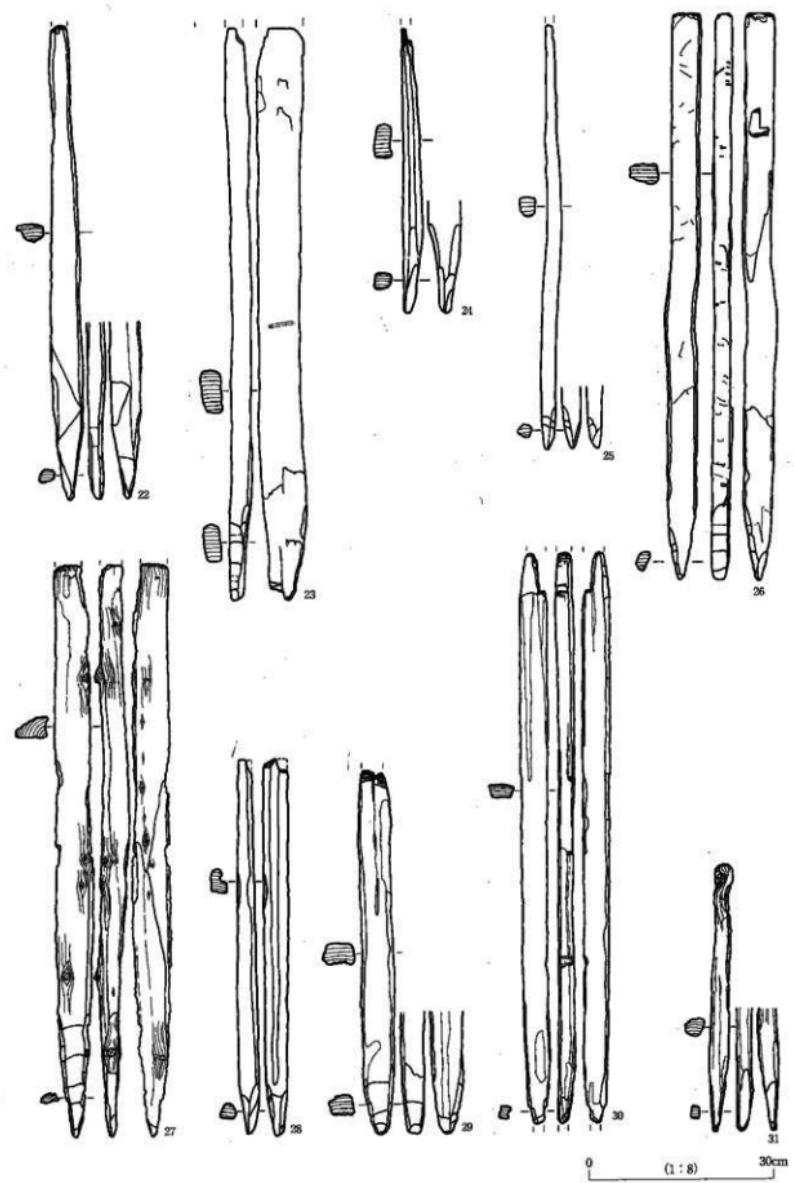
第19圖 出土石果類実測図



第20図 出土木製品実測図



第21図 出土木製品実測図



第22図 出土木製品実測図

第3表 出土金属器観察表

(法量cm³g)

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	23T	鉄砲の玉	125	125	125	10.8	鉄製の玉。表面はざらついて凹凸が目立つ。23Tのアゼ状に高くなったところの裏に出土。 色調…5Y7/1(灰白色)~5Y5/1(灰色)

第4表 出土石果類観察表

(法量cm³g)

番号	出土地点	種類	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	8T	植物の核	2.2	1.6	(1.0)	(0.3)	モモ核 一部欠損
2	8T	植物の核	2.2	1.6	1.5	(0.7)	モモ核 ほぼ完形
3	8T	植物の核	(2.4)	(1.9)	(1.3)	(0.5)	モモ核 一部欠損
4	8T	植物の核	2.4	2.0	(1.6)	(1.6)	モモ核 一部欠損
5	8T	植物の核	2.1	1.7	1.4	(1.2)	モモ核 ほぼ完形
6	8T	植物の核	2.8	1.3	1.4	1.4	モモ核 完形品
7	8T	植物の核	(2.1)	1.8	(1.6)	(1.1)	モモ核 一部欠損
8	22T	植物の核	2.2	(1.6)	1.4	(0.9)	モモ核 一部欠損
9	23T	植物の核	2.6	2.1	1.6	2.3	モモ核 完形
10	23T	植物の核	2.1	1.6	1.6	(0.9)	モモ核 ほぼ完形
11	5T	植物の核	3.4	(1.8)	2.4	(1.2)	ヒメグルミ核 ほぼ完形
12	23T	植物の核	2.6	2.1	1.9	(2.9)	オニグルミ核 一部欠損

第5表 出土木製品観察表

(法量cm³g)

番号	出土地点	種類	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	22T	木製品	(6.7)	(1.7)	(0.7)	(3.0)	用済不明品の完形品。先端部が焼けで炭化し、焼けたあたりに調査が施されたと思われる。
2	8TN-3-22T	棒材	(49.3)	(5.6)	(3.6)	(425.0)	丸木芯もち 頭部欠損 クリ
3	22T	棒材	(76.5)	(4.9)	(5.0)	(910.0)	丸木芯もち 両端部欠損
4	22T	棒材	(71.0)	(5.5)	(3.5)	(590.0)	丸木芯もち 頭部欠損
5	22T	棒材	(38.9)	(9.2)	(7.2)	(970.0)	丸木芯もち 両端部欠損 22Tシルト層と埋層の境目出土。
6	22T	棒材	(69.1)	(9.9)	(9.7)	(3180.0)	丸木芯もち 両端部欠損 22Tシルト層と埋層の境目出土。
7	23T	棒材	(99.6)	(3.4)	(3.7)	(210.0)	丸木芯もち 両端部欠損 23Tの畦畔両端部出土。要性の植物。
8	23T	棒材	(110.5)	(2.2)	(2.0)	(225.0)	丸木芯もち 両端部欠損 23Tの畦畔両端部出土。要性の植物。
9	23T	棒材	(152.8)	(3.5)	(3.3)	(540.0)	丸木芯もち 両端部欠損 23Tの畦畔両端部出土。要性の植物。
10	23T	木杭	(56.8)	(5.5)	(5.5)	(1030.0)	丸木芯もち 頭部欠損
11	8TN-2-41	木杭	(33.5)	(3.3)	(6.6)	(270.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
12	8TN-2-91	木杭	(44.8)	(5.3)	(5.4)	(510.0)	削り材 頭部欠損 サワラ側面削り痕。
13	8TN-3-58	木杭	(77.5)	(4.5)	(8.7)	(1450.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
14	8TN-3-69	木杭	107.5	5.1	7.1	1980.0	削り材 完形品 サワラ
15	8TN-3-66	木杭	(65.0)	(5.2)	(3.5)	(650.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
16	8TN-3-72	木杭	(73.0)	(7.9)	(5.7)	(1550.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
17	8TN-60	木杭	(88.0)	(4.0)	(3.3)	(580.0)	削り材 頭部一部欠損 サワラ
18	20TN-1	木杭	(79.0)	(6.3)	(6.6)	(690.0)	削り材 頭部欠損 クリ
19	20TN-5	木杭	(64.0)	(5.5)	(6.9)	(630.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
20	22T	木杭	(75.0)	(4.1)	(6.8)	(1240.0)	削り材 東部欠損 側面に粗い削り痕。
21	22T	木杭	58.5	4.5	3.0	400.0	削り材 完形品 サワラ
22	22T	木杭	(78.5)	(5.2)	(3.1)	(590.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
23	22T	木杭	(94.2)	(4.0)	(7.6)	(1460.0)	削材 頭部欠損 サワラ
24	22T	木杭	(47.0)	(3.3)	(5.6)	(410.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
25	22T	木杭	(70.0)	(2.6)	(3.7)	(300.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
26	22T	木杭	93.7	5.1	3.3	1000.0	削り材 完形品 細かい削り痕 サワラ
27	22T	木杭	(94.0)	(6.1)	(4.4)	(1010.0)	削り材 頭部欠損 サワラ
28	22T	木杭	(62.0)	(3.4)	(4.2)	(460.0)	削り材 頭部一部欠損 サワラ
29	22T	木杭	(60.1)	(5.5)	(3.8)	(790.0)	削り材 頭部欠損 サワラ 先端削り痕なし
30	22T	木杭	(94.2)	(4.5)	(2.9)	(670.0)	削り材 頭部欠損 サワラ 先端削り痕なし
31	25T	木杭	44.1	3.1	3.1	162.0	削り材 完形品

非木杭の重量は、含水値である。また法量についてはすべて最大値である。

第V章 まとめ

箕輪遺跡は、箕輪町から南箕輪村へかけて広がる天竜川右岸の沖積地で、一帯は昭和27年から3年間にわたって行われた土地改良事業の際に出土した多くの遺物により、水田経営を伴う大農耕遺跡として注目されてきた。箕輪町では、遺跡周辺の開発行為に伴い昭和55年から遺跡の調査が行われ、今回までに15回を数えた。それぞれの調査では、遺物や木杭を主体とした遺構検出や、稲作跡の探査のため機動細胞珪酸体由来するプラントオパール分析などの科学的な調査資料も加えられた。さらに平成12・13・14年度には長野県埋蔵文化財センターに委託して国道153号線松島・伊那バイパスの発掘調査が行われ、今まで遺物の出土はあったものの遺構の検出がされなかった集落遺構を具体的に明らかにし、弥生時代中期後半・弥生時代後期初頭・古墳時代後期の住居址を確認することができた。また、木杭とともに古墳時代の水田趾も確認され、継続して行われてきた発掘調査の成果により遺跡の解明がなされつつある。本章では、各章にて記述してきた総括として各トレンチ周辺の地形を探ってみると共に、今後遺跡の保護・保存に向けた課題を取り上げてみたい。

14年度の調査地は天竜川の堤防より50~150m程内側に入り込んだ天竜川と古河(旧天竜川河道)跡との分岐点に当たり、そのため自然堤防と後背湿地帯に跨っているものと思われる。掘削深度が50cmであったため土層断面から推測されることに主眼を置いた。1~15トレンチ(8トレンチを除く)においては多少の凹凸は見られたものの遺構・遺物の検出はなかった。しかし、中世以降の水田耕作土として捉えた黒褐色腐食土層は14・15トレンチを除いてすべてのトレンチで確認され、水田経営が行われていたことが考えられる。黒褐色腐食土層が検出されなかった14・15トレンチについても土地改良事業時に礫層まで削平されているためと捉えた。8トレンチから出土した水路状遺構も水田と同時代の中・近世の遺構と思われ、この水路は昭和29年に箕輪史研究会が作成した地形図(第8図)に掲載されている水路と一致する。

調査地中央の16・17トレンチでは現在の水田耕作土下にわずかながら黒褐色腐食土層が確認されるものの礫層が上がっており、微高地の要素が伺われる。18・19トレンチは黒褐色シルト層下の黄灰色粘土質層が1m以上堆積しており、湿润な環境下に長期間置かれたためと思われる。

15年度の調査地は戦国時代末期の平城跡といわれている田中城の位置より100m程北に位置する。20~22トレンチにかけては礫層の上昇が認められ、やはり微高地と捉えたがその他のトレンチでは木杭と共に水田の畦畔や踏込み層が検出され、水田経営が行われていたことを確認した。また、23トレンチの試堀坑からは2層の黒褐色腐食土層が確認され、水田経営が行われていた時期が2時期にわたっていると考える。25トレンチの試掘坑からはアシなどの植物遺体が正縮された砂質シルト層や、流木が載った礫層が1mの厚さで堆積しており、やはり古河(旧天竜川河道)跡ではないかと捉えた。田中城に関係する遺構は確認されなかった。北から南まで600mにわたって地形の変化を追ってみた結果、調査地北側に位置する1~15トレンチは多少の凹凸はあるものの湿润な地域で水田耕作が盛んに行われており、16~21トレンチは微高地の部分を含み、その南側の22~26トレンチは湿润で少なくも2時期にわたって水田経営が成され、今後弥生・古墳時代にまで逆上ほる水田趾も発見されることが予想される。

出土遺物については、水路状遺構出土や土地改良事業時の置土に混入していたものもあり、明確に時期を特定することは難しいが、20~26トレンチに出土量が多く、古墳時代から中世・近世にわたる須恵

器・土師器・内耳土器などの破片が出土していることは、西側の御室田地籍の微高地に集落址が検出されたことと繋がりがあるものと思われる。なお、バイバス立会い調査において弥生時代中期の壺破片を初めとして弥生・古墳時代の土師質土器片を多く採取したことは平成12・13・14年度に行われたバイバス調査の際確認された集落址の範囲内と考えられる。

今回の発掘調査は2年間にわたり、総延長600m、幅1~2mに及ぶ区間で行い、非常に幅の狭い調査ではあったが多くの資料を得ることができた。しかし、掘削深度は50cmまで、現在の道路敷きの下は発掘しないなどの制約の下で行われた調査であり、勉強不足で充分な研究がなされず現在に至っている。従って、今後も継続されるだろう調査により遺跡の全体像がより克明に解明されることを願わずにはいられない。

また、今後国道153号線伊那バイパスの4車線開通により、箕輪遺跡にはますます開発の手が加えられることが予想され箕輪遺跡の存続が危ぶまれる中、遺跡の保護・保存に向けて今後どのような活動と対策が必要なのか、この問題に対して早急に取り組んでいかなければならない。

末筆となりましたが、調査の進行及び本報告書作成にあたり、数々のご指導、ご協力を賜りました各関係機関、ならびに個人の方々、更に現場作業に従事していただきました調査団の皆様方に、この報告書の刊行を持ちまして厚くお礼申し上げます。

参考文献・引用文献（著者名50音順）

- 市川脩三 1954 「近世天竜川の治水 伊那郡松島村」『語りつぐ天竜川』建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
- 大場磐雄 「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」『伊那路8-1』
- 木下区誌編纂委員会 1999 「木下区誌」
- 小池修兵 「箕輪遺跡第3回の報告にかえて」『伊那路2-5』
- 財長野県埋蔵文化財センター 1997 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26更埴市内その5」
- 財長野県埋蔵文化財センター 1997 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15」長野市内その3
- 信濃毎日新聞社 1986 「ふるさと地理史⑤ 伊那谷」
- 長野県教育委員会編 「歴史の道調査報告書XXX天竜川」復刊者財長野県文化協会
- 長野県史刊行会 1988 「長野県史考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物」
- 藤沢宗平 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」『信濃第7巻2号』信濃郷土研究会
- 松島信幸 1992 「伊那谷における活動的中央低地帯について」『研究紀要第3号—1992—』飯田市美術博物館
- 松島信幸 寺平安 1999 「伊那谷の地形面の編年と気候変動及び地盤運動との関連」『研究紀要第9号—1999—』飯田市美術博物館
- 松島信幸 2001 「南アルプス北部、三條川沿いの更新世後半（海洋酸素同位体ステージ6以降）の造地形史」『研究紀要第11号—2001—』飯田市美術博物館

箕輪町史編纂刊行委員会	1976	「箕輪町史 自然編現代編」 「箕輪町史 歴史編」
箕輪史研究会	1954	「第2回箕輪遺跡中間報告」「箕輪史資料集第3号」
箕輪町教育委員会	1975	『木下猿樂遺跡』緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1976	『木下南城遺跡』緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1980	『箕輪遺跡』調査第I集
箕輪町教育委員会	1981	『上の林遺跡』第1次・第2次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1982	『箕輪遺跡』調査第III集
箕輪町教育委員会	1982	『上の林遺跡』第3次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1983	『箕輪遺跡』調査第IV集
箕輪町教育委員会	1986	『上の林遺跡』第4次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1991	『箕輪遺跡』第5次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1991	『箕輪遺跡』第6次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1991	『箕輪遺跡』第7次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1993	『上の林遺跡』第6次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	1997	『箕輪遺跡』第10次緊急発掘調査報告書
箕輪町教育委員会	2001	『上ノ平城跡』
箕輪町教育委員会	2002	『福与城跡』平成12・13年度緊急発掘調査報告書
南箕輪村教育委員会	1993	『箕輪遺跡』塩ノ井中田地区

箕輪遺跡の伊那バイパス・松島バイパス関連の発掘調査から

長野県埋蔵文化財センター 市川隆之

長野県埋蔵文化財センターでは平成12~15年度、箕輪遺跡内を縦断する国道153号線バイパス工事に先立って遺跡の姿を記録に残す発掘調査を行った。これまで地元の方々や箕輪町教育委員会によって断続的に調査・研究されてきた遺跡であるが、長い距離を発掘調査したことで新たにわかったことがいくつかある。整理途中ながら発掘の成果を簡単に紹介したい。

1. 箕輪遺跡の地形環境

箕輪遺跡は天竜川や周辺河川から運ばれた土砂が積もって形成された沖積低地に立地する。地表面の耕地整理時の造成土を剥ぐと、川の流れた跡の窪地や三角州状の高まり（微高地）が組みあう凹凸地形が現れる。これらは天竜川を中心とする河川が削ったり埋めたりして形づくったもので、川の流れの変化と共にその姿を変えてきたようだ。

調査域内の地形は北から①狭い河道跡や沢が流れる微高地？②小規模な微高地・埋没河道跡の浅い窪地が組み合う地形、③中央部の深い河跡の窪地が連続する低地部分、④中央南の集落跡がみつかった微高地、⑤南部の埋没途中の河跡が連続する低地にまとめられる。北端を除く発掘域内の大部分は、弥生以後の大きな河が流れた形跡ではなく、広い範囲で植物が腐ってできたとみられる黒色土が覆う。このことから天竜川に近接する北端以外では弥生時代までに現地形の原形ができあがり、以後は植物が繁茂し、浸食をあまり受けない環境であったことが窺える。そして、天竜川の支流などが流れた河跡の窪地は徐々に洪水土等で埋まり、平坦になっていくようすが看取できた。この変遷から凹凸の著しい時期では広範囲の用水・水田造成は難しかったと思われ、河道跡が埋まって高低差が減少するなかで水田が広がっていったと予想される。

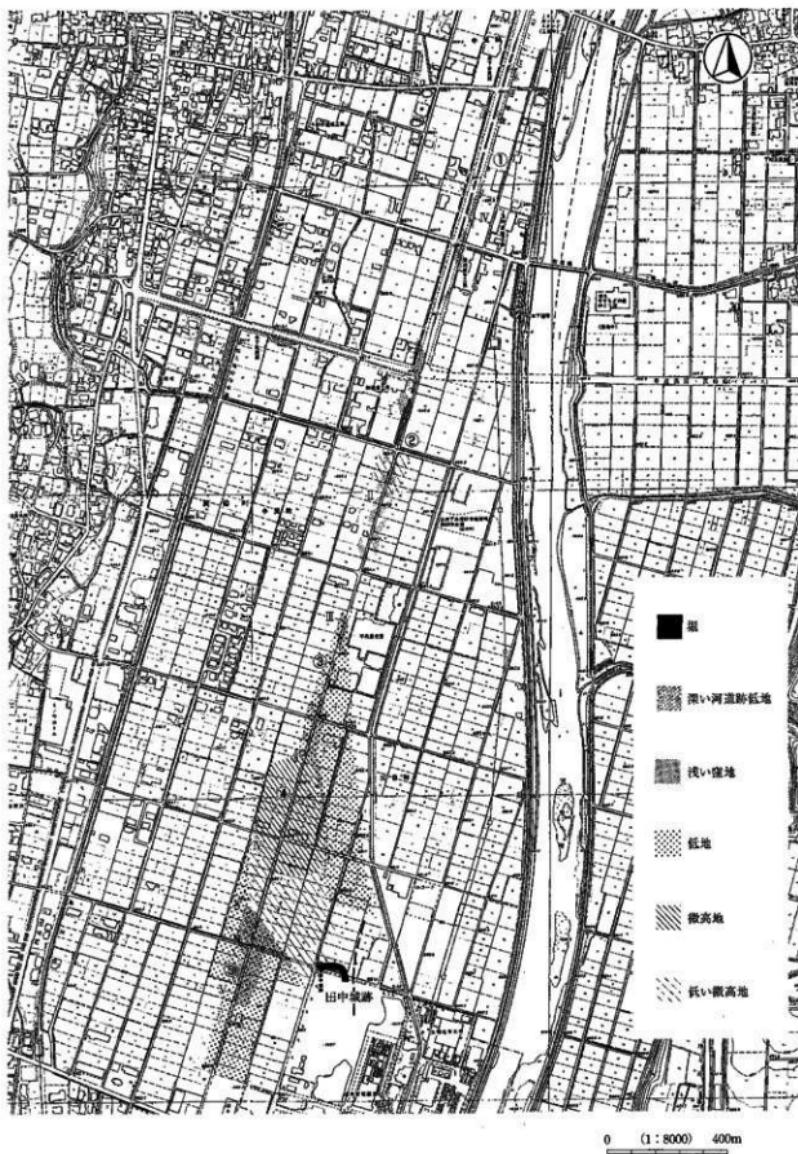
2. 箕輪遺跡内の地形環境と遺構

①狭い河道跡や沢が流れる微高地？の遺構

ここは松島バイパス調査域の最北部で、箕輪遺跡北限と推定されているところである。所々狭い河道跡や沢と思われる帶状の低地が入り込むものの、全般的に高まり地形と思われる。天竜川に近接して洪水にあいやすいためか植物腐植土の黒色土が認められず、わずかに近世以降の耕作関連遺構のみがみつかった。ただ、遺構に伴わないものの古墳時代土師器杯が出土し、周辺に遺構が存在する可能性は残される。

②小規模な微高地・埋没河道跡の窪地が組み合う地形域の遺構

松島バイパス南部から伊那バイパス北部にかかる地点で、調査ではⅥ・Ⅰ・Ⅱ区と呼んだ地区にある。地形は緩やかに南へむかって傾斜し、狭い微高地や浅い河道跡が部分的に認められる。基盤の砂礫層上に形成されていた河跡の窪地も砂やシルトで埋められて浅い窪地としてのみ残り、その上を腐植土の黒色土が覆っている。この地層のようすから河道跡が埋まつた後は、川の浸食を受けることなく植物が繁茂した環境であったようだ。また、黒色土層は地表下40cmほどの浅いところにあり、黒色土層が形成された以後の堆積も少ない。そのため、この場所では水田跡が洪水などで埋められた状態では残っておらず、杭列や溝跡など水田の耕作土よりも下に残る遺構がみつかった。この水田遺構出土土器から



第23図 調査地周辺の地形

すれば、中・近世に水田化されたとみられる。また、弥生後期末の住居跡1軒を発見した。

なお、VI区北端は黒色土層が認められず、天竜川に最も近接する場所からも洪水で浸食されやすい環境であったようだ。そして、形成時期の新しい河（沢）跡や北西から流れる解析谷が認められた。

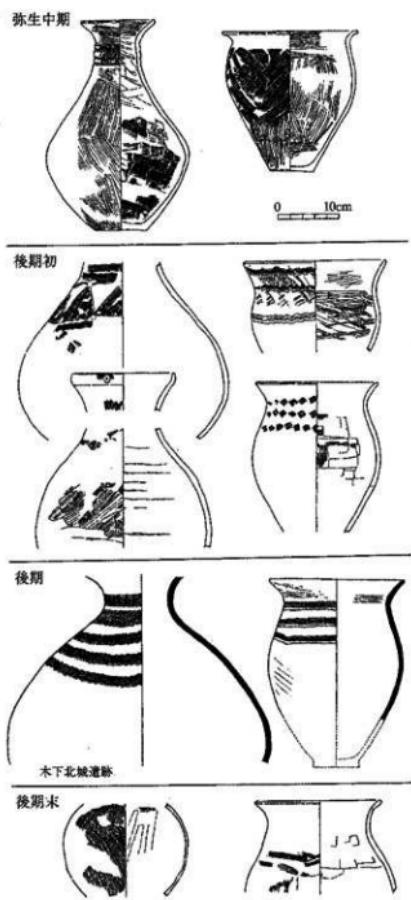
③深い河跡の窪地が連続する低地域の遺構

平井星光堂の工場周辺部にあたる。ここは北部からの傾斜が一端緩やかになり、比較的深く平行する河跡が7本並列して発見された。河跡は幅6~30mではば北西から南東方向に調査区を横断し、南東部でいくつかの河道跡が接続して一つにまとまっている。調査ではこの河道跡低地を北からA~G低地と呼んだが、なかでも比較的深いA低地とE低地で水田面が3~4面調査できた。

A低地は全部で4面の水田遺構を調査したが、地表面に近い上の1a・1b面と呼んだ調査面は②の地形同様に水田耕作土下の遺構のみの検出である。1a面は近世末以後の水田かさ上げの砂礫を埋め込んだ整地遺構、1b面は中世以後の杭列と釀化鉄の集積・溶脱差で認められる畦跡が検出された。2面は水田を一旦放棄のために形成された泥炭質土層に覆われた水田面である。水田面を埋める泥炭層自体が後代に耕作されている可能性もあって、畦の残りはよくないが、狭い水田が並ぶ状況が確認できた。上層の泥炭層からは中世のカワラケと下駄、薄い柵目の板多数が出土し、この水田跡は中世以前のものと位置付けられる。3面水田跡は分割調査した東西地区で土層の様相が異なっているが、同じ水田耕作土の上面と下面を調査している。東側は泥炭土層で覆われた水田面を調査し、河道跡と平行・直交する畦で区切られた狭い水田跡が並んでみつかった。西側は泥炭層の残りが悪いために耕作土下面で畦基部を調査したが、部分的な痕跡しかみつからなかった。西側調査地区では東海系のS字甃破片、東側水田面で弥生後期土器と古墳後期の坏片が出土した。A低地は（弥生後期頃？）古墳後期に水田が営まれたと考えられる。

E低地は最も広く深い河道跡で、ここでも3面の水田遺構を調査した。1面目はA低地2面と同様に耕作土下の杭列・溝跡を検出した。この杭列はC-E低地を貫いて連続し、河道跡が埋没した後の凹凸地形平坦化以後に構築されていることが知られた。2面目は泥炭質土層で覆われた水田面を調査したが、分割調査した地区ごとに様相が異なって問題を残した。畦方位も何種類があり、同じ畦方向でも水田面積は大きなものと狭いものがある。また、上層水田跡の畦基部と思われる遺構も重なって検出され、複数時期の水田遺構が重なる可能性がある。遺物は僅ながら平安時代の須恵器や土師器が出土し、平安時代と考えられる。しかし、同時期の土器がみつかったC低地水田跡では方位に合わせた畦が組み込まれており、E低地2面水田とは様相が異なる。3面は最下層の黒色の強い泥炭質土層を除去して検出した水田跡面である。北西部の若干高い部分では等高線方向と直交方向に区切った狭い水田が並列し、最も深い南側では土留めや沈下防止のために板材などを畦内に入れて杭で固定した木芯畦跡がある。また、この深い部分には水田放棄後に自然流路が流れ、水田面を壊している。出土遺物は古墳後期が僅かにあるが、木芯畦内からは弥生後期末のS字甃や古墳時代前期の甃などが出土した。E低地3面では弥生中期・後期土器も出土しているが、弥生時代と特定できた遺構はないため、弥生時代の水田の様相は明らかにできなかった。

以上のように、箕輪遺跡では河道跡低地を利用して水田が営まれはじめ、泥炭層が形成されているように何度かの耕作と耕作放棄を繰り返す一方で、河道跡が埋没して平坦化していく様相が知られる。そして、埋没して凹凸地形の高低差が減少した段階で河道跡間を貫く杭列を代表として水田域が広がっ



第24図 笑輪遺跡と周辺遺跡出土の弥生土器

たと推測される。なお、他の河遺跡ではC低地で平安時代の可能性がある水田面1面、F・G低地で古墳時代と思われる水田面が調査できた。

④微高地域の遺構

上記の河遺跡の南側には周囲より若干高い高まり地形（微高地）があり、ここでは弥生中期後半・弥生後期・古墳時代後期の集落跡が検出された。また、縄文前期の土器も出土し、縄文前期には微高地が形成されていたことが知られた。それ以後、縄文後期・晩期の土器も出土しているが、堅穴住居跡が確認できたのは弥生中期後半からである。ここでは堅穴住居跡が11軒発見され、栗林式と呼ばれる長野県北半部に分布する土器が多く出土した。石器は木材伐採用と考えられている大型蛤刃石斧、加工用の扁平片刃石斧などの磨製石斧、磨製石鎌、打製石鎌、石劍などが出土した。このなかで未製品を出土したことから蛇紋岩製扁平片刃石斧・珪質岩製磨製石鎌・黒曜石製打製石鎌は遺跡内で製作されていることが知られたが、一方で下呂石製打製石鎌・大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧の一部は製品で運び込まれているようだ。

弥生後期の住居跡は、微高地域に広範囲に散って最も数多く検出された。住居跡の規模の格差はあまりないが、1軒のみ1辺10m前後の大型住居跡がある。また、下伊那によく知られるいわゆる「圓溝址」と呼ばれる溝が長方形に廻る建物跡もみつかった。出土した土器は下伊那地域と類似した土器で占められ、石器は新たに打製石斧が認められるようになる。

古墳後期は微高地中央に掘立柱建物跡が集中し、その北側に堅穴住居跡が分布する。遺構配置に計画性が窺われ、しかも大小さまざまな規模の住居址が構成されている。堅穴住居跡はカマドをもつ住居跡が5軒みつかり、カマドが普及していることが知られる。土器は土師器を主

体として僅かに須恵器が伴う。器種は壺と呼ばれる小型食器が多い特徴をもつ。古墳後期以後の住居跡は確認できず、集落として利用されることはなかったようだ。

⑤南部の埋没途中の河跡が連続する低地域の遺構

微高地以南は緩やかに傾斜しながら埋没途中の河道跡が連続する地形となる。河道跡の形成時期は明らかでないが、微高地南側に隣接したIV区と呼んだ調査地区の河道跡内では縄文後期と思われる土器の散布が認められ、縄文後期には河道跡が埋没し始めていたと考えられる。この南部の河道跡は北部のI・II区ほど埋没しきっておらず、III区北の河道跡低地ほど深くもない。ここでは埋没途中の河道跡を覆う地表面下40cm前後にある黒い泥炭質土層下面で水田面を検出した。この黒色土層自体はI・II区よりもはるかに泥炭質が強く粘土質となっていることから、湿地環境で形成されたものと思われる。検出した畦跡は微弱なもので、この黒色土を耕作土とした水田下面に残された畦基部と考えられる。ただし、黒色土層下で検出した畦跡にも下層の粘土層自体を耕作したとみられる事から、複数時期の畦基部が混在する可能性があって水田面自体の年代を特定することは困難に思われた。黒色土層からは弥生後期・古墳後期・平安・中近世の陶磁器が出土し、このなかで最も出土量の多いものが中近世陶磁器である。なお、黒色土層中や上面で構築された杭列や礎を埋め込んだ畦遺構も見つかっており、これらは黒色土下面でみつかった畦基部とは異なる方位のものがある。したがって、少なくとも中世以後に水田の区画が変化していることが推測できた。

3. まとめにかえて

今回の調査は箕輪遺跡内を縦断するように調査し、様々な成果を上げることができた。詳細は報告書に譲るが、成果の第一はこれまで箕輪遺跡内に存在が想定されながらも具体的な場所がわからなかった集落遺構を具体的に明らかにできたことがある。そして、弥生中期後半・弥生後期初頭・古墳時代後期の3時期の住居跡が発見されたが、なかでも弥生中期後半の集落遺構は、当該期の遺跡が少なかった上伊那地域の様相を知る上で貴重な資料といえよう。また、弥生中期後半は長野県北半分に多く分布する栗林式の土器で占められていたが、弥生後期になると逆に下伊那地域の土器で占められるようになり、弥生中期後半と後期の境で大きく交流のあり方が変化していることが推測できた。

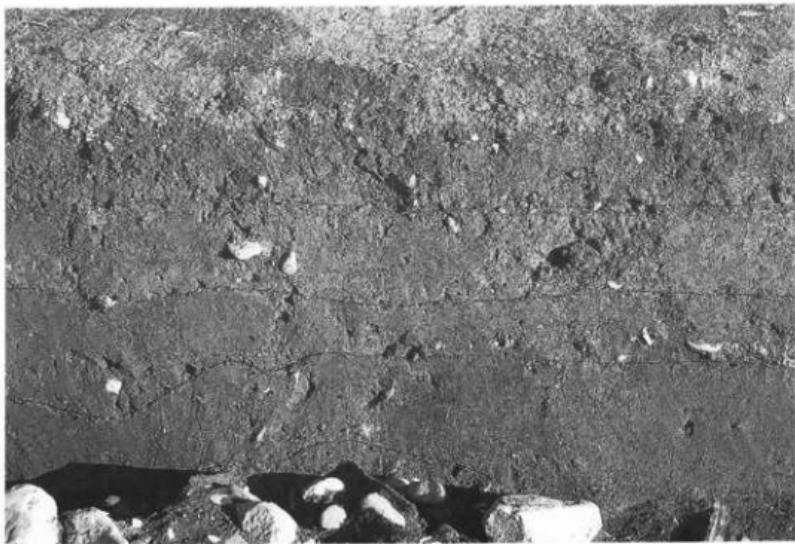
二つ目は箕輪遺跡内では河道跡低地を中心に古墳時代には水田化されていたが、河道跡が埋没するに従って微細な凹凸地形の高低差が減少し、水田域も広がってくることが明らかになった。また、古墳時代の水田跡の木芯畦跡はこれまで長野県内で発見されている水田跡と同じ構造であることも確認できた。

以上、簡単ながら箕輪遺跡の発掘調査成果について紹介した。今回の発掘でも残された課題は多く、今後より検討が深化されるべき内容も含まれることは断っておきたい。

図版



発掘調査地遠景



調査区土層堆積状況



1 トレンチ土層断面



1 トレンチ状況



2 トレンチ土層断面



2 トレンチ状況



3 トレンチ土層断面



3 トレンチ状況



6 トレンチ土層断面



6 トレンチ状況

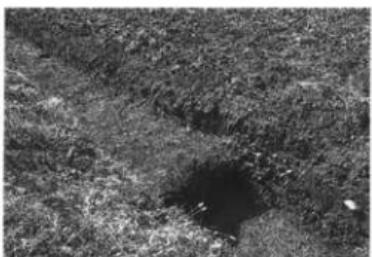
3



7 レンチ土層断面



9 レンチ土層断面



10 レンチ土層断面



12 レンチ土層断面



11 レンチ土層断面



11 レンチ状況



15 レンチ土層断面



15 レンチ状況



17 レンチ状況



19 レンチ状況



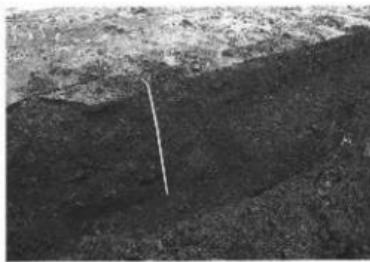
セントラルコーポ前立会い土層断面No1



セントラルコーポ前立会い土層断面No2



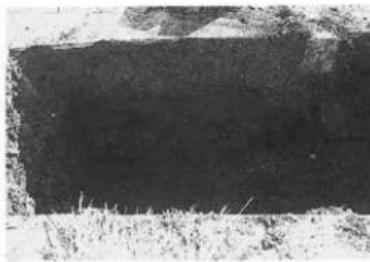
セントラルコーポ前立会い土層断面No3



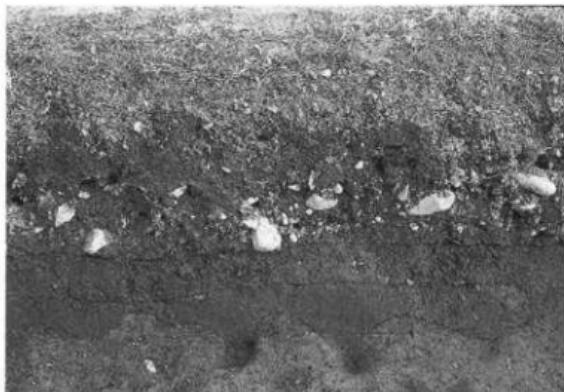
セントラルコーポ前立会い土層断面No4



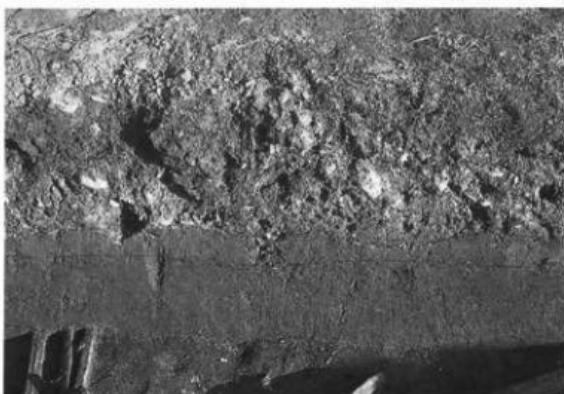
セントラルコーポ前立会い土層断面No5



セントラルコーポ前立会い土層断面No6



20 レンチ土層断面



22 レンチ土層断面



24 レンチ土層断面

8 レンチ水路状遺構 1



20 レンチ水田・畦畔
水路状遺構 2



22 レンチ木杭出土状況

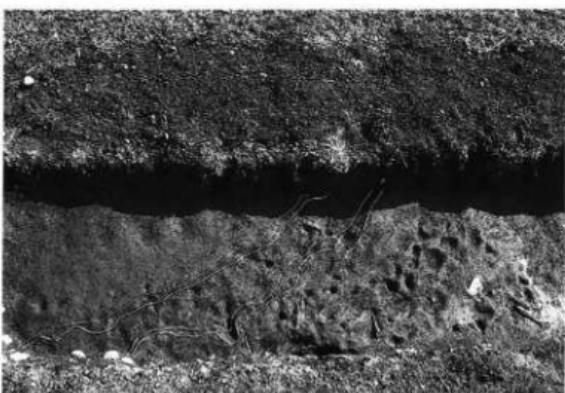




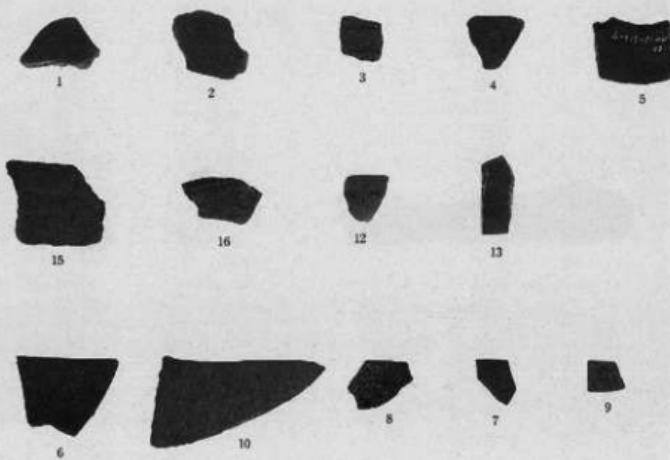
23 トレンチ畦畔（造）
出土状況



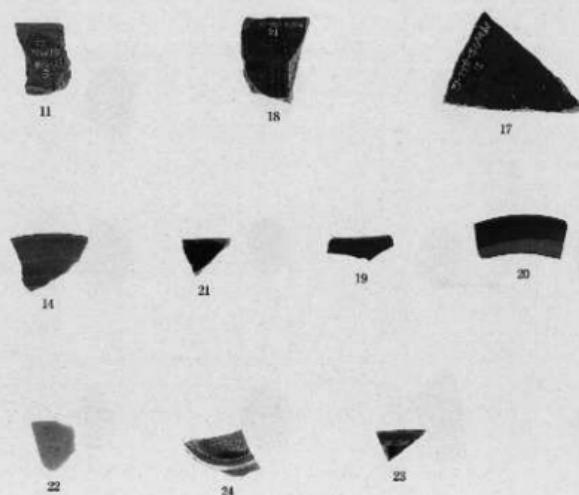
24 トレンチ水田路込み造構



25 トレンチ水田路込み造構・
溝状造構 1 出土状況



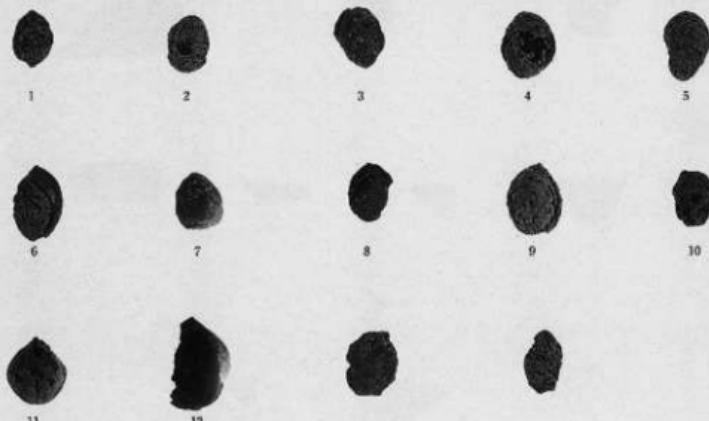
出土遺物（弦生土器・土師器・須志器）



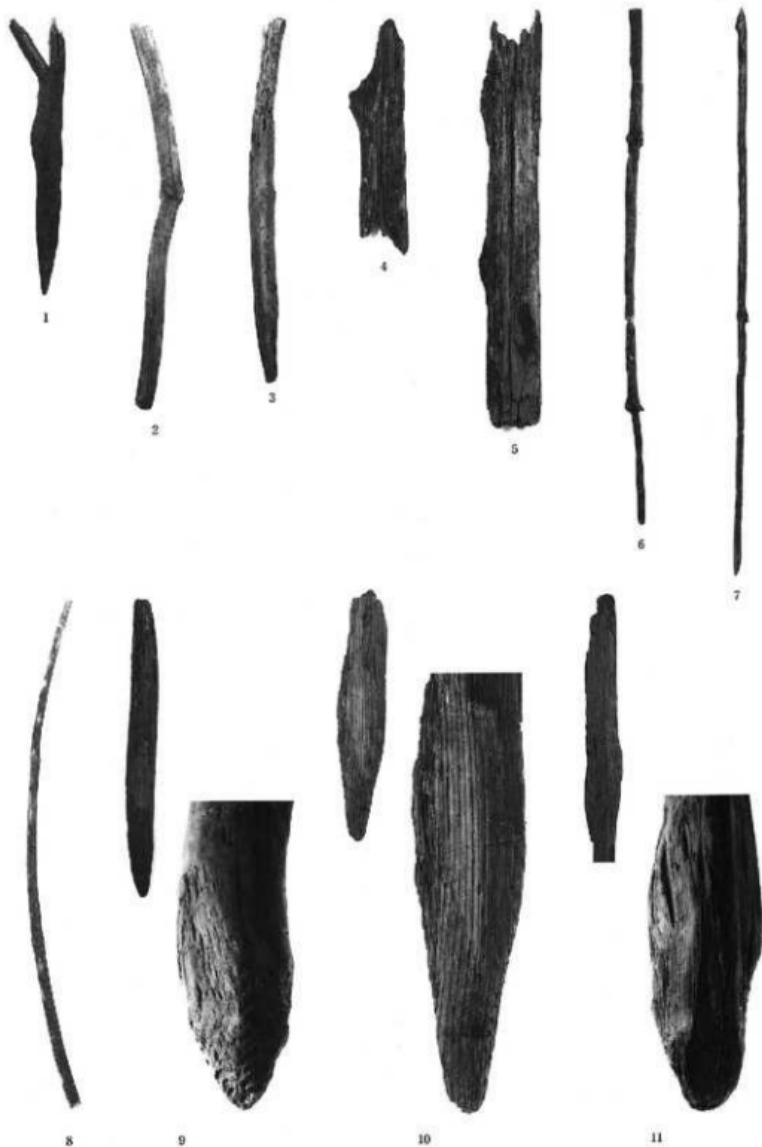
出土遺物（陶磁器）



出土木製品（不明）・出土金屬器（鐵砲玉）



出土石器類



出土木製品



出土木製品



22



23



24



25



26



27



28



29

出土木製品

報告書抄録

ふりがな	みのわいせき							
書名	箕輪遺跡							
副書名	町道503号線改良事業に伴う第14・15次埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	有賀一治・根橋とし子・池上賢司							
編集機関	箕輪町教育委員会							
所在地	〒399-4601 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10291番地 TEL 0265-79-3111㈹							
発行年月日	2004年3月26日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みのわいせき 箕輪遺跡	ながのけんかみいなぐん 長野県上伊那郡 みのわいせきおおあざ 箕輪町大字 みっくまち 三日町967-8番地 他	市町村	遺跡番号	°'.''	°'.'''			
		20383	98	35° 53' 15"	137° 5' 34"	2002.11.19 ~ 2002.12.17 2003.11.18 ~ 2003.12.19	14次300m ² (対象面積 600m ²) 15次300m ²	町道503号 線拡幅工 事に伴う 事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
箕輪	水田址	古墳後期 中世 近世	水田 畦畔 水路状遺構 溝状遺構	木枕 土師器 須恵器 陶磁器 石果類(モモ・クルミ) 鉄砲玉			幅1m、長さ600m、深 さ0.5mの調査範囲で あった為、土層観察と 地形変化の確認に主 眼を置いた。	

箕輪遺跡

町道503号線改良工事に伴う

第14・15次埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成16年3月26日 印刷

平成16年3月26日 発行

発行所 長野県上伊那郡箕輪町教育委員会
〒399-4601
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地
TEL 0265-79-3111 FAX 0265-79-6368

印刷所 株式会社小松総合印刷
〒396-0111 長野県伊那市大字美鷺10243-4
TEL 0265-72-3129 FAX 0265-73-6650